

Olympic

オリンピック教育

Vol.6 2017/04-2018/03

Education



筑波大学オリンピック教育プラットフォーム
筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会

目次

はじめに

オリンピック・パラリンピック教育；私たちの活動	宮本 信也 ...	2
2020 年に向けた全国各地でのオリンピック・パラリンピック教育	真田 久 ...	2

活動報告

平成 29 年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」について 真田 久、宮崎 明世、大林 太朗、福田 佳太 ...		3
カレル大学（チェコ・プラハ）でのオリンピック教育に関する研究会	大林 太朗 ...	8
第 11 回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム報告	藤原 亮治 ...	9
日独スポーツ会議“The 10th German – Japanese Sport Symposium” 報告	宮崎 明世 ...	14

実践報告

附属小学校オリンピック教育等活動報告	白坂 洋一、梅澤 真一 ...	15
附属中学校の取り組み	山形 友広 ...	17
実践報告（附属高校）	鮫島 康太 ...	19
附属駒場の取り組み	登坂 太樹 ...	23
附属坂戸高等学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践	藤原 亮治 ...	25
附属視覚特別支援学校	寺西 真人 ...	27
附属聴覚特別支援学校における取り組み	渡邊 明志 ...	29
アダプテッドスポーツ「タグ柔道」の取組紹介	深津 達也 ...	32
附属桐が丘特別支援学校におけるオリンピック教育の取り組み	寒河江 核 ...	34
附属久里浜特別支援学校のオリンピック教育の取組	河場 哲史 ...	38

特別寄稿

2018 年平昌大会におけるオリンピック・パラリンピック教育	福田 佳太 ...	40
--------------------------------------	-----------	----

はじめに

オリンピック・パラリンピック教育；私たちの活動

平成 29 年度 筑波大学副学長・理事、附属学校教育局教育長 宮本 信也

「オリンピック教育」第 6 巻をお届けします。筑波大学においては、さまざまな組織で、またさまざまな形でオリンピック、パラリンピックに関連する活動が行われています。その中で、オリンピック教育プラットフォームと附属学校オリンピック教育推進専門委員会が中心となって行っている活動をまとめたものが本冊子です。本冊子は、2013 年に第 1 号が発刊された後、毎年、刊行されておりますが、実は、2011 年度に附属学校オリンピック教育推進専門委員会が発行した「オリンピック教育報告集」が発展したものです。本号も、プラットフォームによるさまざまな活動と附属学校における実践活動の報告が掲載されています。これらの活動は、筑波大学のオリンピック・パラリンピック教育の一端ではありますが、附属学校 11 校全校の活動がまとめられているのが特色といえると考えております。

東京オリンピック・パラリンピックが 2 年後に開催される年となりました。平成 30 年（2018 年）は、ボランティアの募集も始まります。漠然とまだ先だと思っていたオリンピック、パラリンピックの東京 2020 大会が、急に身近に感じられるようになってきました。こうした状況を踏まえ、筑波大学および附属学校教育局でも、ボランティア要請に貢献する活動を実施あるいは検討中です。2017 年度、試行段階ではありますが、附属学校教育局主催で「高校生のためのオリンピック・パラリンピックボランティア講座」を開催いたしました。高校生を対象としたのは、今の高校生が 2020 年には 18 歳以上となり、アクティブに活動していただけるのではないかと考えたことによります。2018 年度は、東京オリンピック・パラリンピックに向けた活動をさらに展開していければと思っております。

2020 年に向けた全国各地でのオリンピック・パラリンピック教育

筑波大学体育系教授、CORE 事務局長 真田 久

オリンピック教育プラットフォーム（CORE）では、2010 年の設立から約 8 年にわたり附属学校群や全国各地でのオリンピック教育の継続的な研究・支援を行ってきました。とくに、2015 年度から主な事業として取り組むスポーツ庁の「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」では、府県市の教育委員会と連携し、学校や地域における教育実践やムーブメントの醸成を推進しています。

さて、韓国・平昌でのオリンピック・パラリンピックが閉幕し、次はいよいよ東京 2020 大会です。つくば市ではスイスオリンピック協会との事前キャンプ基本合意が交わされ（平成 30 年 4 月 11 日）、筑波大学のキャンパス内施設も練習拠点として使用されることとなります。CORE では、IOC の認可の特徴を生かして、東京 2020 大会とそのレガシーとしてのオリンピック・ムーブメントおよびパラリンピック・ムーブメントの推進に向けて、「研究」と「実践」の両輪で事業を進めてまいります。

今後ご高配のほど、よろしく願いたします。

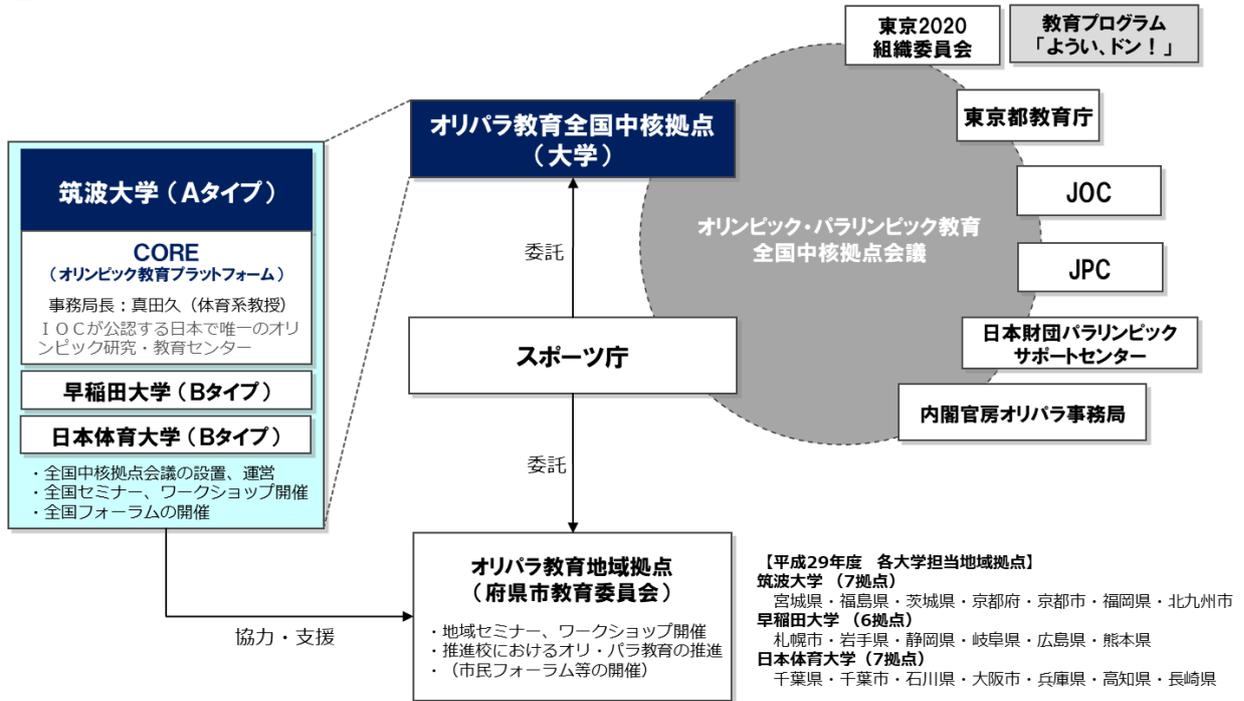
平成 29 年度スポーツ庁委託事業
「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」について

CORE 事務局 真田 久、宮崎 明世、大林 太朗、福田 佳太

2020 年東京大会の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針（平成 27 年 11 月 27 日閣議決定）において、政府は「大会開催を契機に、オリンピック・パラリンピック教育の推進によるスポーツの価値や効果の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて貢献できる人材を育成する」ことを決定した。本事業は、この方針の実現に向けて、スポーツ庁の委託を受けた全国中核拠点（筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）と地域拠点（平成 29 年度：計 20 地域）が連携し、学校や地域一般におけるオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを推進することを目的とするものである。

今年度、筑波大学は次ページの体制およびスケジュールをもとに、全国中核拠点（A タイプ）として、主に以下の事業を実施した。

平成 29 年度オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業
推進体制



(主なスケジュール)

時期	事業内容
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・大学内における推進体制の整備 ・各担当地域拠点（7地域）との連携体制の整備（～9月） ・第1回全国中核拠点会議への参加
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・全国セミナー（第1回）の開催 ・福岡県地域セミナーへの参加および実践支援 ・各推進校等におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践支援（～2月）
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回全国中核拠点会議への参加 ・筑波大学附属学校群におけるオリンピック・パラリンピック教育のモデル授業研究・開発（～2月）
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・全国セミナー（第2回）の開催 ・京都府地域セミナーへの参加および実践支援 ・茨城県地域セミナーへの参加および実践支援 ・京都市地域セミナーへの参加および実践支援
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・福島県地域セミナーへの参加および実践支援 ・宮城県地域セミナーへの参加および実践支援 ・国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム2018（エストニア）におけるオリンピック・パラリンピック教育のプログラム調査、情報収集
9月	（上記事項の継続）
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・北九州市地域セミナーへの参加および実践支援 ・第3回全国中核拠点会議への参加
11月	・各地域拠点の推進校等におけるオリンピック・パラリンピック教育の現場視察（～2月）
12月	・第4回全国中核拠点会議への参加
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・全国フォーラム（宮城県）の開催 ・福島県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・京都市地域ワークショップへの参加、実践支援
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・京都府地域ワークショップへの参加、実践支援 ・宮城県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・福岡県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・北九州市地域ワークショップへの参加、実践支援 ・茨城県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・平昌大会におけるオリンピック・パラリンピック教育プログラム調査
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・全国ワークショップの開催 ・第5回全国中核拠点会議への参加 ・事業報告書冊子および事業報告用ウェブページの作成 ・委託事業完了報告書の提出

(1) オリンピック・パラリンピック教育全国中核拠点会議への参画

スポーツ庁および関係団体（内閣官房オリパラ事務局、東京2020組織委員会、東京都教育庁、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター、筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）からなる「オリンピック・パラリンピック教育全国中核拠点会議」に出席し、2020年東京大会に向けたオリンピック・パラリンピック教育の推進方法について情報共有と検討を行った。

(日時)

- 第1回：平成29年 4月14日（金）16:00～18:00
- 第2回：平成29年 6月22日（木）15:00～17:00
- 第3回：平成29年10月16日（月）14:00～16:00
- 第4回：平成29年12月22日（金）14:00～16:00
- 第5回：平成30年 3月29日（木）10:00～12:00

(場所)

文部科学省 16F 第3会議室（東京都千代田区霞が関3-2-2、各回共通）

次に、同会議で設定された本事業におけるオリンピック・パラリンピック教育における「5つのテーマ」を整理する。

【本事業における「オリンピック・パラリンピック教育」の内容について】

オリビズムの教育的価値（努力から得られる喜び、フェアプレー、他者への敬意、卓越性の追求、身体・意志・知性の調和）、パラリンピックの価値（勇気、強い意志、インスピレーション、公平）の普及に向けて、以下のテーマを設定する。

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

(2) 各地域拠点の推進校におけるオリンピック・パラリンピック教育の支援

全国中核拠点の主要な役割の一つは、地域拠点におけるオリンピック・パラリンピック教育の総合的支援である。まずは、各地域拠点のコーディネーター（担当指導主事等）を対象とした「全国セミナー」（事業説明会）を開催するとともに、その後各地域で行われる「地域セミナー」（事前研修会）に参加し、とくに情報提供の面で支援を行った。そして、各推進校における教育実践をサポートし、実践報告会としての「地域ワークショップ」に参加した。年度末には、全ての全国中核拠点と地域拠点が一堂に会して成果と課題を共有する「全国ワークショップ」（全体報告会）を開催した。



全国セミナー（平成29年5月8日実施 於：筑波大学東京キャンパス文京校舎119）

(3) 地域におけるオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの機運醸成

2020年東京大会に向けた全国での機運醸成に向けて、筑波大学では宮城県を会場に「全国フォーラム」を開催した（日本体育大学は東京都、早稲田大学は福岡県にて）。石巻市の推進校によるオリンピック・パラリンピック教育の実践報告や、地元ゆかりのアスリートによる講演会、そして協会の支援によるフェンシングとボッチャの体験会を実施した。

平成 29 年度 スポーツ庁委託事業
「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」全国フォーラム

みんなの 東北から盛り上げよう! オリンピック・パラリンピック

プログラム

13:00
開会行事

13:10~13:40
**宮城県オリンピック・パラリンピック
教育推進校実践報告**

- 石巻市立 貞山小学校
- 石巻市立 瀧波中学校

13:40~14:40
オリンピック・パラリンピアン 講演会

千田 健太 氏 宮城県仙台市出身。2008年北京オリンピックでは11位入賞。2012年ロンドンオリンピックでは男子フルール種目で銀メダルを獲得。全日本選手権大会に4回連続出場。日本フェンシング協会理事、JOCアスリート委員。



藤本 怜央 氏 宮城MAX所属、日本選手権9連覇。車いすバスケットボール部の中心的存在として、2004年アテネ、2008年北京、2012年ロンドン、2016年リオデジャネイロ大会で4大会連続でオリンピック出場。リオ大会では日本代表主将を務めた。



(休憩・配置換え:20分)

15:00~16:50
フェンシング・ボッチャ体験会

スポーツ体験を行いますので、運動しやすい服装でお越し下さい。

16:50~17:00
閉会行事

2018 1/21 日 **入場無料**

定員 150名 先着順

お申し込み

- はがき宛先
氏名、性別、年齢、住所、電話番号、正しい有難の明記をお願いします。
【東北から盛り上げよう! みんなのオリンピック・パラリンピック】事務局
〒103-0014 東京都千代田区千代田1-26-9 NSビル26-3F
- FAX番号
☎ 03-5652-7170
- スマホの方はコチラから▶



場所:ホテルメルパルク仙台
(仙台市宮城野区榴岡5-6-51) 仙台駅より徒歩10分

お問い合わせ先
筑波大学オリンピック・パラリンピック教育推進研究室
☎ 03-3942-5039



主催：国立大学法人筑波大学

協賛：スポーツ庁、CORE

開催案内用ポスター

○宮城県オリンピック・パラリンピック教育推進校実践報告

石巻市立貞山小学校からは、普段の教育活動にいかに関連させるかという視点で報告が行われた。また、特徴的な実践として、石巻市に保存されている旧国立競技場の聖火台の花壇作成や、日本財団パラリンピックサポートセンターと連携した障がい者スポーツの理解に関する教育活動が紹介された。

石巻市立瀧波中学校からは、「自律する中学生（凛と生きる）」という主題で、これまでに同校で実施されたオリンピック、パラリンピックに関する教育実践が紹介された。東日本大震災直後の校内の様子を紹介後、その後の復興過程と仮設校舎における運動会の様子、そして「石巻復興マラソン」への参加が報告された。

○オリンピック・パラリンピアン講演会

千田健太氏、藤本怜央氏が登壇し、それぞれ競技との出会いからオリンピックやパラリンピックに出場した経緯、そして東日本大震災後のスポーツを通じた復興支援活動などが語られた。そして講演後は、本学の真田教授による進行でトークショーが行われ、スポーツを通じた教育における重要なキーワード「グッドルーザー」という概念について議論が展開された。フロアとの質疑応答を交えつつ、具体例を挙げながら「試合に負けた時にこそ人間的な成長が望まれるのでは」という結論に至った。

○フェンシング・ボッチャ体験会

参加者は2つのグループに分かれ、前半・後半それぞれ45分間の競技体験を行った。フェンシング体験ゾーンでは千田健太氏が講師となり、基本ステップや用具・防具に関する説明、そして日本フェンシング協会の体験キットを使用した実戦形式の体験も行った。

またボッチャ体験ゾーンでは、日本ボッチャ協会東北支部の若松伸司氏を講師としてお迎えし、競技特性やルール説明、「ランプ」と呼ばれる補助具の使い方を説明いただいた。その後、チームに分かれて対戦形式の競技体験を行った。

参加者アンケートでは、「2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会の興味・関心が増加した」という設問に対し、有効回答数の90.2%の参加者が「非常にそう思う」あるいは「思う」に回答した。とくに、競技体験会については「障害者スポーツに理解を深めることができた」（50代・介護職）との記述回答もみられた。一方で、本フォーラムの開催時期および時間帯については改善を求める回答もあり、次年度の開催に向けた課題が浮き彫りとなった。一般市民に対する集客方法の再検討を含め、全国各地でのオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの波及に向けた有効な方策を再考する必要がある。



フォーラム会場の様子



ボッチャ体験会

カレル大学（チェコ・プラハ）でのオリンピック教育に関する研究会

筑波大学体育系 大林 太郎

2017年5月28日から4日間、チェコで行われたオリンピック教育に関する研究会議に出席した。会場はプラハ中心部に位置するカレル大学、1348年創立の歴史あるキャンパスで、各国の研究者およびIOC関係者等による報告とグループ討議は行われた。

研究会議の主題は、Celebrating Olympic Education – A Global Review and Book Launch for “Olympic Education: An International Review” である。開始にあたり、座長のRoland Naul氏（“Olympic Education”, Meyer & Meyer Sport社, 2008の著者）からオリンピック教育の歴史的経緯が語られた。ピエール・ド・クーベルタンをオリンピック教育の「父」とすると、その「祖父」にはトマス・アーノルド校長とイギリスのパブリックスクールの教育が存在すること、さらにはドイツの体育家グーツムーツの汎愛主義とオリンピック教育の共通性が指摘された。

その後、各国の研究者、IOC関係者（Olympic Studies CentreのNuria Puig氏、The Olympic MuseumのAnne Chevalley氏）の発表が続いた。私も主催者からいただいた“Olympic Education as Global Education 1964/2020”というテーマで30分間のプレゼンテーションを行い、1964年の東京大会に向けて政府が主導した「オリンピック国民運動」と文部省が作成した「オリンピック読本」の内容を紹介した。アジア初のオリンピック開催が日本人の国際平和、異文化理解の価値観を育てたことや、そのレガシーが2020年の東京大会に向けたオリンピック教育の施策に反映されていることを示し、概して欧州を中心に語られるオリンピック（教育）史に新たな視点を提供した。

なお、この会議は2017年2月に刊行されたオリンピック教育の学術書“Olympic Education: An International Review”（Routledge社）を記念して開催されたものである。本書はオリンピックやスポーツ教育、コーチングなどを専攻する研究者や学生を対象に、オリンピック教育の歴史と現状を紹介する書籍であり、28チャプターからなる本編では、歴史的背景とともに各国・地域の教育行政、システムに合わせたオリンピック教育の現状が示されている。拙稿を含め、ご一読いただければ幸いである。



Roland Naul氏のオープニングセッション



Deanna L. Binder氏と筆者

第11回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム報告

筑波大学附属坂戸高校 教諭 藤原 亮治

1. 第11回大会へ向けて

これまでの経緯についての詳細はオリンピック教育 Vol.4 をご覧いただきたい。前々回までは「筑波大学附属高校から2名の生徒と1名の教員を派遣。筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）が派遣費用を出す」形であった。なお現地の滞在費は、主催者である国際ピエール・ド・クーベルタン委員会（CIPC）の負担である。それが前回から、フルメンバーの7名を出せることとなり、どのように選考するか、またこれを機にどのようにオリンピック教育を国内に広げていくかが重要な課題であった。さまざまな組織と協議の上、最終的にはCORE主催で「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム2015」を開催、その参加者から7名を選考する形をとった。今年度は関東地区（筑波大学）と東海地区（中京地区）の2会場で実施し7名を選考した。内訳は筑波大学附属坂戸高校2名、筑波大学附属高校、筑波大学附属駒場高校、自由学園男子部、中京大中京高校、至学館高校から各1名である。引率者として筆者も初参加となった。前回大会では6月に2度自由学園で準備会を実施している。しかし3か月に3度上京することは東海地区の経済的負担が非常に大きいこと、高校生の帰宅時間を考慮した場合、午後の限られた時間しか準備できないというに対して、改善の必要性を感じていた。そこで今年度は筑波大学附属坂戸高等学校の宿泊可能施設において7月15日～17日にかけて2泊3日の合同合宿を開催することとした。開催にあたり、中京地区から1名の先生が引率および水泳指導、COREから真田久筑波大学体育学群長が特別講義と法被、スポーツフォートゥモローから交流に必要な物資、日本オリンピックアカデミーからオリンピック教本の提供があった。また附属坂戸高校のプールの故障に際し、近隣の坂戸中学校の協力や、食事面での飲食店の協力など多くの協力者のご理解で充実した準備会が開催できたことを付記しておきたい。



2. 国際 YF におけるオリンピック教育

1) 第11回大会概要

第11回大会は、エストニアの第二都市タルトゥに隣接する街であるウルヌルメで開催された。最終的にアルゼンチン、オーストラリア、オーストリア、ブラジル、キプロス、チェコ、エストニア、フランス、ドイツ、イギリス、ギリシャ、インド、イタリア、日本、ケニア、マレーシア、モリシャス、ノルウェー、ポーランド、南アフリカ、スロバキア、スペイン、ウクライナの23か国24校の生徒120名、引率教諭・主催者50名、ボランティア40名の総勢約230名が参加した。フルメンバーは7名とされているが、各州代表が参加するオーストラリアからは9名の参加が認められている。今回は「オブザーバースクール」という名称は用いられず、みな「クーベルタン・ネットワーク」の一員であるという位置づけであった。初参加はブラジル、アルゼンチン、南アフリカ、ジンバブエで、いずれも生徒2名であった。イタリアとフランスも2名だった。



日本からの派遣団は8月17日に成田を発ち、中継地ヘルシンキで2泊して準備を整え、現地入りした。スケジュールをいかに記す。

8月17日（木） 11:00 成田～16:00 ヘルシンキ（約11時間） ※時差は7時間

8月18日（金） ヘルシンキ市街地散策、パフォーマンス準備など

8月19日（土） バスで空港へ～タルトゥ空港～バスに乗り換えウルヌルメへ（3時間）

- 8月20日(日) オリンピック史講義、スポーツ博物館、市内観光、開会セレモニー
- 8月21日(月) アートワークショップ①、ディスカッション①、知識テスト、miniEXPO
- 8月22日(火) 水泳、スポーツテスト、アートワークショップ②、ディスカッション②、キャンプファイア
- 8月23日(水) 選択スポーツ、クロスカントリー、アートワークショップ③、ディスカッション③、アートパフォーマンス発表会
- 8月24日(木) 国立公園散策、民俗資料館、市街パレードとパフォーマンス
- 8月25日(金) アンケート、選択スポーツ、閉会セレモニー、パーティ
- 8月26日(土) 10:00 ホテル発、13:00 タルトゥ発(ヘルシンキ乗り換え)
- 8月27日(日) 8:00 成田空港着(約11時間のフライト)、解散

2) クーベルタン賞について

国際 YF の中核のプログラムは「クーベルタン賞」を獲得するためのコンテストである。毎回以下のように構成されている。

- ① Community Service … 地域貢献活動を事前に行い、校長先生の承認を得る
- ② Olympic Knowledge Test … オリンピックに関する筆記テスト
- ③ Sports Tests … リストアップされたすべての種目に挑戦
- ④ Arts Performance … 10 のワークショップから選択
- ⑤ Olympic Values … 事前にポスター作製。現地では3つのテーマでグループ討議



各項目実施内容は若干異なるが、5項目の構成は変わらない。他者との切磋琢磨を通じて得られ身体・意志・知性のバランスの取れた人間形成を促すコンテストになっている。参加者全員がクーベルタン賞を獲得できるわけではない。一定以上の成果を求められるが、それ以上に、各プログラムを通じて努力、挑戦する姿勢を一貫して求められる。また様々なプログラムの中に交流や体験が組み込まれることで、多様な他者への尊敬など、オリンピックの価値である「卓越・友情・尊重」が全フォーラムを通じて感じられていくように配慮されている。

第11回大会における「クーベルタン賞」選考の内容は次のとおりである。



① Community Service (地域貢献活動)

事前にボランティア活動に取り組み、校長先生の証明書を現地到着時提出する。参加生徒は、自治会清掃ボランティア、社会福祉施設での介護ボランティア、スポーツ大会運営協力ボランティアなどに取り組み、校長と面談を実施し、証明書が発行されていた。

② Olympic Knowledge Test (知識テスト)

クーベルタンの生涯や功績、古代・近代オリンピック史に関する知識テストは、事前の学習が非常に重要であった。全て英語で出題されることから、英文の過去問を解きながら出題の傾向などを理解し、必要な知識を自主学習で培ってきた。1度でクリアできなかった生徒は再試験が課せられる。日本の生徒は英語への苦手意識を事前準備でカバーし、基準点をクリアすることができた。

③ Sports Tests (スポーツテスト)

100 m 走、走り幅跳び、座位ボール投げ、水泳(50m 自由形)、クロスカントリー(男子 3km・女子 2km)は全員必須である。いずれも合格基準が設けられており、複数で記録を下回ると再試験が課せられる。今回の再試課題はローイングテストであった。学校にプールがなく泳ぎを知らない生徒も多く存在し、スタッフのサポートを受けながら挑戦する姿には惜しみない応援とねぎらいの拍手が送られている様子が非常に印象的であった。クロスカントリーは粗いウッドチップが敷き詰められた会場で実施されたがあいにくの雨で足場は非常に柔らかく、まるで砂浜を走っているような強度になってしまった。足を取られてケガをする選手もいるなど、非常に厳しい環境での実施であったがそんな中で筑波大付属高校の内田さんが女性の部で断トツの1

位を記録した。特徴的な種目として、座位での遠投には多くの生徒が苦戦していた。



④ Arts Performance … 10 のワークショップから選択

今回開催されたワークショップは以下のとおりである（日本チームが参加したワークショップは☆印で示す）。それぞれが選択したワークショップを各国の生徒と協働して学習し、その成果を発表会形式で実施した。



影絵☆



エストニアfolkダンス☆



⑤ Olympic Values … 事前にポスター作成。現地では3つのテーマでグループ討議がアートパフォーマンスのグループで計3回実施された。内容には以下のとおりである。

Discussion Topic 1 Olympic Values

オリンピックの価値（Excellence, Respect, Friendship）がスポーツや身体活動、人生において最もよく表現される場面を明らかにしなさい。スポーツ以外の生活のなかでこれらの価値は私たちにとって何をもたらすのかを考えなさい。

Discussion Topic 2 Life Balance

Consider these quotes:

“Life is like riding a bicycle. To keep your balance, you must keep moving.” Albert Einstein

この言葉を理解するうえで、若者がよい行動選択をするうえでその抵抗要因・圧力となるものはどのようなものがあるか列挙しなさい。そのような中でこれらの要因・圧力をどのように管理して、バランスのとれた幸せな生活を創造するかについて話し合う。

Discussion Topic 3 Sport and Physical Activity – Links to Well-Being

身体活動が健康の3側面にどのような利点をもたらすか。

議論された内容はクロージングセレモニーの際、代表生徒が発表した。

これに加えて、参加校は事前に

Consider some of the social and cultural factors that motivate and/or create barriers for people to participate in physical activities or sport.

What would you do to persuade a friend to get active and join sports activities?



というお題が与えられ、各国で最大 A3 用紙 3 枚程度のポスターを作成することが求められた。

各国のポスターは会場入ってすぐの下足ロッカーに掲示された。

3) スポーツ・文化交流活動

クーベルタン賞選考プログラムのほかに、各国の交流を促進するプログラムも数多く用意されていた。実施されたプログラムは以下のとおりである

- ① エストニアスポーツ博物館見学
- ② タルトゥ市内観光
- ③ パラリンピックスポーツ・アクティビティ体験
- ④ ミニエキスポ
- ⑤ 農文化博物館見学&キャンプファイヤー
- ⑥ スポーツ交流
- ⑦ 国立公園散策
- ⑧ 市街地パレード&各国パフォーマンス

エストニアの文化を異なる国の生徒同士で共有しながら、それぞれの国、多様な人々を理解するためのプログラムや生活の工夫がなされていたのが印象的であった。

今回はエストニアのオリンピック・パラリンピアンが招かれ、生徒との交流を図った。またオーストラリアからも水泳のオリンピックが2名スタッフとして参加しており、彼らのキャリアトークは各国の生徒の刺激となったようである。

ミニエキスポでは各国の紹介ブースで想いおもいの催しが施され、途中スタッフに注意されるほどの盛り上がりを見せた。参加生徒から教員・スタッフ含め交流を深める良い機会になった。日本は「伝統的なおもちゃ・遊び」を紹介し、折り紙で「鶴」を折るワークショップは片付けの時間にも多くの生徒が押し掛ける盛況ぶりであった。

タルトゥ市内パレードでは先頭を楽器隊を載せた街宣車の後ろを練り歩き、町の人々の大きな関心を集めた。各国のパフォーマンスは3時間にも及んだが熱が冷めることなく、町の人と一体となって踊る、唄う時間が共有された。日本は「伝統的な動き」をモチーフに作られた演武を披露し、多くの方から称賛を受けていた。全国から集まった生徒が短い期間の中で小さな衝突はありながらも、海外で踊り切れた経験は大きな財産となるはずである。



3. 参加生徒感想より

伊豆野 竜也 (筑波大学附属坂戸高等学校)

世界中から高校生が集い、クーベルタンやオリンピックについて理解を深められました。また、異文化理解、相互理解の良い機会であったことは確かであったと思います。私はフォーラム中に世界の生徒のすごさをたくさん知ることができました。特に、「できないことをはじない」ことは、今の日本で胸を張って言える生徒はいないと思いました。例えば、水泳ができない生徒がいても、決して馬鹿にするのではなく、手を叩き、のどがつぶれそうになるまで声大きく声援を送っていた生徒に感動しました。日本では、「できない」ことに挑戦している人間の努力ではなく、「できない」という事実のみ焦点を当てていると私は考えました。このフォーラムを通し、私は、日本人の「褒める」能力が欠如していると断言できるようになりました。それと同時に、この発見を生かしていこうと思いました。例えば、体育の授業の時に大きな声を出すことが挙げられます。私は、体育の授業中に大きな声で一所懸命に人を褒めることなんてしてきませんでした。しかし、努力している人を全力で褒めるように生きていこうと思います。かなりスケールの大きいことを言っていますが、私は今回のフォーラムを通して変わりました。そのことだけは理解していただきたいです。



最後になりましたが、世界中の学生との交流の機会を設けてくださった、すべての方々、そして日本代表全員に感謝します。

4. おわりに

日本の生徒は全員クーベルタン賞を受賞することができたことは引率教員として非常に喜ばしいことでした。ここまで筑波大学をはじめとして多くの先生方のご尽力を賜りましたことをこの場をお借りして感謝申し上げます。交流は非常に豊かなものであり、生徒の成長とかけがえのない仲間を獲得できる貴重な経験が保証される。日本の学生もこの7日間で見違えるほど成長した。帰り際には誰もが涙するフォーラムなど早々経験できるものではない。一方でフォーラム自体が学校単位で参加している国が多い中、学習の一つの成果として位置付けた場合、各校でその思いは異なる面もある。まして、選抜参加した非クーベルタンスクールとの意識差は教員間にも存在していた。だからこそ、今フォーラムの重要性が再確認できるわけなのだが、次の大会以降そうした参加校教員・組織間の今フォーラムの価値の再確認を共有することでさらに大きな価値を生み出すフォーラムになると確信した。2020年直後は日本での開催が期待されている。これまでの嘉納イズムがしみ込んだ日本の教育の価値の再確認と再出発を可能にするためにも、認知を拡大していける＝ムーブメントをおこせる仕掛けを期待する。



日独スポーツ会議 “The 10th German – Japanese Sport Symposium” 報告

筑波大学体育系 宮崎 明世

2018年3月13日－15日にドイツのヴェストファーレン・ヴィルヘルム大学（ミュンスター大学）において、第10回日独スポーツ会議が開催された。本学会に参加し、“The Nationwide Development of Olympic and Paralympic Education for Tokyo 2020 in Japan”のタイトルで研究発表を行った。発表の概要は以下の通りであった。まず、2020東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて我が国で進められているオリンピック・パラリンピック教育について概要を説明した。東京2020の大会ビジョンと組織委員会が示す「アクション・レガシープラン」から、オリンピック・パラリンピック教育の必要性と学校教育における可能性を示した。さらに、これまでに日本で開催されたオリンピックに向けての教育実践について、1964年東京では公共マナーや国際理解教育、1972年札幌では英語教育や国際理解、1998年長野では環境教育や国際交流プログラム「一校一国運動」を中心に展開されたことを紹介した。2020年東京大会に向けて日本では、さまざまなオリンピック・パラリンピック教育が展開されており、組織委員会は教育プログラムの名称を「よい、ドン!」と定め、その普及・拡大を図っている。このプログラムは近年開催された、2012年ロンドン大会の”Get Set”や、2016年リオデジャネイロ大会の”Transforma”とは異なる形で展開されており、都道府県の教育委員会制度の活用がそれにあたる。プログラムでは、教育実践を行った学校が「よい、ドン!スクール」として認証され、実践事例が集約されている。開催都市である東京都では、すでにオリンピック・パラリンピック教育が盛んに行われているが、日本全国に目を向けると、地域における格差が大きいのが現状である。スポーツ庁はオリンピック・パラリンピック教育の全国への普及のために、2015年に「オリンピック・パラリンピックムーブメント調査研究事業」を立ち上げ、この事業は2016年から「オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業」として継続されている。この事業の2016年度における実践から、筑波大学が担当した4府県を対象に年度末に提出された報告書を分析し、実際のオリンピック・パラリンピック教育で行われている活動と、その成果と課題を導き出した。実際の活動は、オリンピック、パラリンピアンなどの外部講師を招いて、講演やスポーツ体験を行うものが多く、教科活動に組み込まれるケースは少なかった。教育活動を通してさまざまな成果が上げられたが、教育課程への位置づけや予算の問題、教師の負担などの課題も明らかとなった。

発表を受けて参加者から、教育内容についての具体的な質問や、学校にこのような教育を導入することへの学校や社会からの反響などについて質問が寄せられた。参加者の関心も高く、日本のオリンピック・パラリンピック教育の現状を国際的な場で紹介することができた。



シンポジストの阿江美恵子先生（東京女子体育大学）とミュンスターの大聖堂にて



阿江先生、工藤和俊先生（東京大学）と会場にて

1. オリンピック教育活動①（講師招聘）

平成 29 年 12 月 8 日（金）5・6 校時（13:25～14:55）に、本校体育館にて、オリンピックを招聘しての教育活動を行った。講師は、シンクロナイズドスイミング三井梨紗子元オリンピック選手である。三井さんは、リオデジャネイロオリンピックに出場し、デュエットとチームの種目で銅メダルを獲得している。

実施した主な内容は、講演および陸上におけるシンクロ競技体験であった。まず、「メダル獲得までの軌跡」と題し、講演をしていただいた。対象児童は 3 年生から 6 年生まで、教職員を含めて計 180 名であった。

講演は、まさに子どもたちにとって魅力ある内容であった。選手時代の練習メニュー、1 日の食事内容や回数についてクイズを交えながら、話を進めていった。その中にある代表選手としての苦労、そして喜びなどについても体験を交えながら、児童にわかりやすく話をされた。また、コーチ陣からかけてもらい、勇気づけられた言葉。メダル獲得までの戦略として、選手、コーチ、スタッフがどのように連携、協力しあっていたかについて映像を交えつつ、講演は行われた。

さらには、2020 年の東京にオリンピックがやってくるこの意味、迎え入れる側に立つ、私たちにできることはどんなことがあるかについて話をされた。数々のオリンピックに出場した選手だからこそ分かる気づきを、子どもたちの立場に置き換えて話をしてくださった。

陸上でのシンクロ競技体験は、音楽に合わせて集団行動をすることで 1 つの演技を創り上げるというものであった。手足を上げる、全体で移動するなど基本的な動きであったため、初めて体験する子どもたちにも楽しめるものであり、かつ集団で創り上げるという達成感を味わえる内容であった。体験活動後、講師である三井さんから、児童らに競技体験に込めた願いが語られた。それは、この体験を通して、シンクロナイズドスイミングという競技にもっと興味をもってほしい、そして、一人だけではなく、みんなで創り上げることの楽しさやおもしろさを知ってほしいというものであった。

実際にオリンピックを招聘し、講演では選手の苦労や喜びなど生の声を聞くことができ、また体験活動を通して、全体で一つのを創り上げるという達成感を味わうことができた。子どもたちはメディアを通してだけでなく、実際の経験を通してオリンピックについて内容を深めることができた。さらには、迎える側の意識として、2020 年に自分たちに何ができるかという Can の意識から、何をしよう、何かをしてみたい Want の意識へと変わっていった。

子どもたちの学びの場のさらなる広がりにつながる今回の教育活動であった。

（文責 白坂 洋一）

2. オリンピック教育活動②（マスコット投票・授業公開）

平成 29 年 1 月 11 日（木）2 時間目（9:30～10:10）に、本校 5 年生教室で東京オリンピックのマスコットキャラクターについて話し合う活動を行った。児童らは冬休みを利用して、それぞれのキャラクターの特徴について調べ学習を行っていた。本時では、「東京オリンピックのマスコットとしてふさわしいのはどれか」



という課題で話し合いを進めた。きめる場面は2度、設定した。1度目は名前カードを使って自分の立場をきめる、そして2度目は6枚のシールを使ってどれがふさわしいかについて自分の考えを数値化して示す場である。

話し合いにより、それぞれのキャラクターの特徴だけでなく、それぞれの持つ意味、さらには「そもそもオリンピックの意味とは何か」についての話し合いにまで深めることができた。その中で資料として活用したものが、東京都の作成したオリンピック資料である。子どもたちの必要性が高まったときに、資料を活用することによって、オリンピックに対する考えを深めることができた授業になった。

(文責 白坂 洋一)



3. オリンピック教育活動③ (全校朝会)

本校では毎週火曜日の朝の時間に全校朝会がある。平成29年1月30日火曜日の朝会では、本校体育科の教諭真栄里耕太が、間近に開催が迫った、冬季オリンピック、いわゆる平昌オリンピックについて紹介する話をした。

いつ、どこで、どのような競技が行われるのか、映像を交えて紹介した。

特に、2018年の冬季オリンピックは大韓民国の平昌で、2020年は日本の東京で、そして、2012年の冬季オリンピックは中華人民共和国の北京で行われること、つまり、オリンピックが3回続けて、アジア、日本周辺で行われることを説明した。朝会において、全校児童にオリンピックについての紹介をすることで、子どもたちはオリンピックに興味を持ち、自分でオリンピックについて調べてみたいという気持ちにさせることに成功した。

(文責 梅澤 真一)



1. 教科学習《対象者：1年生全員・2年生全員》

- (1)1年生：社会科・歴史的分野において、古代ギリシア・ローマ文明を理解させるにあたり、古代オリンピックをとりあげ、当時のオリンピックと近代オリンピックとを比較させる活動を行った。古代オリンピックの存在自体を初めて知る生徒もいたが、その意義や近代オリンピックとのつながりを含めて、意欲的に学んでいた。
- (2)2年生：「体育理論」において「オリンピックを学ぶ」として授業を行った。内容については、東京都教育庁発行『オリンピック・パラリンピック学習読本 中学校編』の「近代オリンピックとクーベルタン」、「嘉納治五郎とオリンピックについて」、「オリンピックが目指すもの」、「オリンピックと環境」、「オリンピック・レガシー」、「パラリンピックが目指すもの」、「Discover Tomorrow」に該当する内容を、プリントとパワーポイントによる視覚資料、映像資料を活用した授業により学習した。それぞれの学習内容について、生徒によって事前に持ち合わせる知識に差があったものの、オリンピックやパラリンピックの成り立ちや意義、狙い等について意欲的に学んでいた。

2. 総合的な学習の時間《対象者：1年生全員、3年生コース選択者20名》

- (1)1年生：情報リテラシーを養うため、「新聞のつくり方を学ぶ」と題した授業を行った。新聞記事の材料として『オリンピック・パラリンピック学習読本 中学校編』（東京都教育庁指導部指導企画課編集・発行）を活用した。

- (2)3年生選択者（24名）『スポーツを多角的に捉えよう』

①パラリンピック種目に挑戦

【内容】

- ①「目隠し&案内体験」②「ゴールボール」「シットイングバレーボール」二種目について、本校の施設で実現可能となるようなルールなどを相談して工夫して実践した。

【実際の様子】

生徒たちは互いに声を掛け合いながら、「パラスポーツ・附属中バージョン」を創ることができた。ゴールボールは、取り組みやすく、互いに助言しやすい工夫ができていた。シットイングバレーボールは、パスなどの技能が難しく、座って動きが制限されるルールをどう自分たちらしく工夫できるかが課題であった。



「ゴールボール」のようす



「シットイングバレーボール」のようす

②オリンピック・パラリンピック関連の展示など見学

【場所】

パナソニックセンター東京

【内容】

「いっしょにTOKYOをつくろう。」プロジェクトによる「スポーツ・文化・教育」をテーマとした展示や、「Active Learnig Camp」を見学し、オリンピック・パラリンピックについて学んだ。

- ③各自の興味・関心に沿った研究を小論文としてまとめ、コース内で発表し、また3年生全体へ発表した。オリンピック・

パラリンピックを通して、スポーツと社会の多様な関係性へと視野を広げるテーマが研究された。

(3) 3年生選択者(23名) * (2) の3年生とは別コースの生徒

平成28年度より3年間、「エネルギー教育モデル校」の指定を受けている本校では、エネルギー教育の一環としてLPガスをよりよく知るための講習会を実施した。

そのなかで、1998年の長野オリンピックの聖火トーチはLPガスで灯ったことが紹介され、実際に使用された聖火トーチを手にするなどの体験が行われ、生徒がオリンピックを身近に感じるよい機会となった。



長野五輪のトーチを持つ

本校生徒

3. HR活動<対象者：1・2年生全員>

元オリンピックである千田健太氏が来校し、講演とフェンシング体験、また質疑応答などを行った。1年生・2年生ともに学年活動として2時間ずつ同内容を実践した。以下に生徒の感想の抜粋を紹介する。

(1年生の感想より)

- 印象に残った言葉は、「仲間に支えられないと乗り越えられない」ということです。誰にでも人生の中で挫折はすると思うけれど、そんなときに近くにいる人に助けられると乗り越えられると感じました。
- 頑張ろうと思って頑張るのも大事だけど、楽しんでやるのが大事だと思った。また「楽しい!」を行動に移すこと、ただ「楽しい」を感じるだけで終わらず、次に繋げていく力があるのがただただ凄いなと思った。自分にとっての“楽しい”をみつけて何か自分の力にできたらいいなと思った。
- 千田さんはフェンシングの良いところを言っている時など、とてもいい顔をされていて本当にフェンシングが好きなんだなと思いました。好きという気持ちを大切に取組んでいきたいです。
- 「才能の差は、全て努力でカバーした」これは、とても心に残った。自分がそれを好きであることが重要。今の部活で、それを生かすことは「絶対」にできるので、頑張りたい。

4. 実践的活動

視覚特別支援学校中等部の方々との交流会を実施し、フロアバレーなどを実施した。準備・運営等には次年度への課題もあったが、参加者が昨年の24名から26名に増えたことが成果である。

5. 附属中学校としての「オリンピック教育」の拡大の可能性

これまでの「オリンピック教育」は、主に保健体育科の教員が担当する授業や総合学習のコース、所属する学年のHR活動などが実践の場となっていた。本年度もその傾向は維持されているが、社会科での古代オリンピックの授業やエネルギー教育の一環としての長野五輪のトーチなど、教科や領域を超えての実践も見られた。

このように東京オリンピックが近づいて、国際理解・異文化理解などをはじめ、さまざまな切り口から現実的な課題として学びを深める必要のある内容がより多く見いだせるようになるのではないかと感じている。また、オリンピック・パラリンピック教育を通して、授業実践として工夫されたコンテンツが、オリンピック後の附属中や附属学校にとって大きな教育面でのレガシーとなることが期待される。

1. 日常の活動として

保健体育科を中心とする日々の授業や学校行事、部活動等、学校における教育活動全般にわたって「オリンピズム」を学ぶ姿勢は、嘉納治五郎校長のころから本校が取り組み、いまでも受け継がれている。とくに保健・体育理論の授業では、オリンピックやパラリンピックを題材にした授業や、それに付随する様々な問題を取り上げて生徒に思考させる授業が行われ、生徒の問題意識を育む貴重な場となっている。2020年の東京大会の開催決定以降に行われたリオ大会・平昌大会を観た生徒の意見や感想は、これまで以上に充実したものに変わってきたと感じる。オリンピックとパラリンピックだけでなく様々なスポーツ場面を身近なものとしてとらえ、そこから多くのことを感じ学ぶ姿勢を養うことがオリンピズムであると考えれば、本校で行っている「スポーツ大会」、学校をあげて戦う他校との「総合定期戦」なども、オリパラ教育の代表的な一例として挙げることができる。

【本校のスポーツ大会】

毎年10月、全18クラスから各3名ずつ選出された計54名からなる委員によって運営されるスポーツ大会を実施している。前年度からの引継ぎをふまえ、企画、事前準備、当日の運営、後片付けまでを生徒が主体的に行うよう指導している。一般生徒は選手として参加する。対戦相手は同じ学年の他クラスとし、6月頃に1クラス40名をバレーボール、バスケットボール、サッカー（男）、フットサル（女）の三種目に分け、チームごとに練習計画をたて活動を始める。練習方法なども自分たちで考え、休み時間や放課後、秋休みなどを利用し授業時間外にも多くの練習時間を確保させた。

3種目は別に、学年のクラスごとでの対抗戦（1年生：跳んで跳んで、2年生：二人三脚、3年生：大縄跳び）、また1～6組による対抗戦として全クラスから代表者を選抜し「全校リレー」を企画した。今年は雨天により1日半の順延を余儀なくされたため、学年種目とリレーは中止とした。

水たまりのグラウンドやコート面を整備し続け、計画の変更とその連絡もスムーズに行われ、大きな問題なく終えることができた。全体の運営を担う生徒、全力でプレー、応援する生徒。多くの生徒がスポーツの持つ教育効果を甘受していると考えられる。



スポーツ大会の様子

2. スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）としての取り組み

本校の一つの柱として挙げられるのが、今年で4年目となる「SGH スタディ（総合的な学習の時間・土曜日実施各学年1単位）」である。一年次では研究調査に関する手法（データ収集、統計など）を学習し、二年次と三年次の前期までで論文を作成するというものである。オリンピック教育に関連する部分を以下に示す。

(1) 第3学年の概要

昨年度の研究活動を継続し、4～6月に最終報告（論文作成）、7月に最終発表会、9月に優秀研究発表会・表彰、まとめ・アンケート

ト調査がおこなわれた。各グループの生徒たちは Google Classroom 上に置いたテンプレートをダウンロードして、A4 判で 8～15 ページ（およそ 1～2 万字）の論文作成に取り組んだが、特に苦労していたのは英文と和文で執筆を課された Abstract（梗概）である。和文で 400 字程度、英文 100 語程度で作成した。内容的な要件として、「研究課題・目的・課題設定理由・研究の意義・先行研究のまとめ・研究方法と過程・結論（結果と考察）・今後の課題」を含むこととした。また、分担執筆が基本となるため、文責が明らかとなるよう注意を促した。最終発表会では、各グループを 7 会場に割り振り、2 週にわたって発表を行った。各グループは 10 分（発表・質疑応答）の時間が与えられ、分野を横断する形で自分達と異なる分野の研究発表を聞くことになった。教員は発表の動画記録やプレゼンファイルなども参考に、優秀グループの推薦をおこない、優秀論文を選出した。オリパラ分野のテーマを以下に記す。

- ・アスリートと怪我（女子 5 名）
- ・肉体的疲労とパフォーマンスの関係性（男子 4 名）
- ・サッカー選手のセカンドキャリアについて考える（男子 3 名、女子 1 名）
- ・競技の認知度とオリンピック・パラリンピックの関係（男子 3 名）
- ・バリアフリー・ジェンダーフリーから見るオリンピック・パラリンピック施設内におけるトイレの表記についての考察と提案（女子 4 名）
- ・アスリートを身近で支える人々（女子 6 名）
- ・マイナースポーツとメディア（女子 4 名）
- ・街中のマークを改善しよう（女子 6 名）
- ・東京オリンピックの知名度を上げよう（男子 2 名、女子 1 名）

(2) 第 2 学年の概要

4 月にオリエンテーション、SGH スタディで取り組む 3 分野（①オリンピック・パラリンピックにおける諸課題、②地球規模で考える生命・環境・災害、③グローバル化と政治・経済・外交）の紹介、教員によるミニ講義などを行い、5 月研究グループ形成とテーマの焦点化を行い、6 月から本格的な研究活動に入った。研究活動を昨年よりも早く開始することによって、夏休みや休日を利用してテーマ設定の具体化のためのフィールドワークなど行えた。「パラリンピックとオリンピックの融合を目指す」というテーマを掲げたグループは、パラスポーツ大会にボランティアスタッフとして参加し、その際には海外のパラスポーツ選手やそのコーチへのインタビュー調査を行うこともできた。価値観や考え方の多様性を認識しながら調査・研究を進めている。これらの成果と共に研究活動は活性化し、1 月には 2 週にわたって中間発表会を行った。オリパラ分野のテーマを以下に記す。

- ・パラリンピックとオリンピックの融合を目指す（女子 3 名）
- ・野球とスポーツ科学（男子 1 名、女子 2 名）
- ・部活と食事（女子 5 名）
- ・オリンピックにおける PR 活動（男子 3 名、女子 3 名）
- ・ボールの回転のメカニズム（男子 4 名、女子 1 名）



全日本視覚障害者柔道大会でドイツの選手とコーチにインタビュー調査をする生徒

3. 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム、および国内クーベルタン・嘉納ユースフォーラムへの参加

2年に一度開かれる「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF）」が、2017年8月19～26日にエストニアで開催された。第11回大会には本校から生徒1名が派遣され、23か国から集まった約120名の高校生とともにスポーツやアート活動、座学や討議などを通してオリンピズムを学んだ。派遣生徒は2016年12月23～25日に筑波大学で開かれた「クーベルタン・嘉納ユースフォーラム2016（国内 YF）」で選考され派遣に至った。なお、国内 YF2017は本校にて、以下の要領で実施された。

○クーベルタン・嘉納ユースフォーラム2017 実施要項

【目的】

- 2020年へ向けて高体連加盟校の生徒・教員が、1) オリンピック・ムーブメントやオリンピズムを理解し、2) 学校や競技種目を越えて人的交流をはかる。
- 2020年以降も高校生対象の国内ユースフォーラムを続けていくための組織づくりに貢献する。^{注1)}

【主催】

東京都高等学校体育連盟研究部（東京都高体連研究部）^{注2)}

特定非営利活動法人サロン2002（NPO法人サロン2002）^{注3)}

【協力】 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）^{注4)}

【期 日】 2018年3月10日（土）～11日（日）

【会 場】

桐蔭会館（〒112-0012 東京都文京区大塚1-9-1 筑波大学附属中学・高校 敷地内）

【参加者】

高校生30～40名および引率教諭（高校生は各校7名以内）

^{注5)} 原則として、東京都高体連研究部常任委員および全国高体連研究部活性化委員の勤務校およびこれまで「クーベルタン・嘉納ユースフォーラム」に参加した学校から募集する。

【プログラムとスケジュール概要】

◆3月10日（土）

- | | |
|-------------|---|
| 12:30～13:00 | 受 付 |
| 13:00～13:50 | オリエンテーション |
| 14:00～15:30 | 講義① TOKYO2020 ボランティアとしてのグローバルマナーとおもてなしの心 ^{注5)} |
| 15:40～17:00 | 討 議 「オリンピズム」関連 ^{注6)} |
| 17:00 | 解 散 |

◆3月11日（日）

- | | |
|-------------|--|
| 8:30～9:00 | 受 付 |
| 9:00～10:30 | 講義② クーベルタンと嘉納治五郎 ^{注7)} |
| 10:40～12:10 | 演 習 OVEP（Olympic Value Education Programm）を用いたグループワーク ^{注8)} |
| 12:10～13:00 | 昼食・休憩 |
| 13:00～15:00 | 実 技 ボッチャ ^{注9)} |
| 15:00～15:30 | クロージング |
| 15:30 | 解 散 |

【参加手続き】

別紙2「参加者名簿」を用いて各学校で取りまとめる（校長印必要）

【参加費】 無料

【問い合わせ先】

筑波大学附属高等学校 中塚義実（NPO法人サロン2002 理事長 / 全国高体連研究部活性化委員長）

TEL：03-39411-7176（代表） Eメール：ynakatsuka2002@kza.biglobe.ne.jp

< 注 一 覧 >

- 注1) 近代オリンピックの創始者の名を冠した「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム(YF)」が、CIPC(国際ピエール・ド・クーベルタン委員会)主催で2年に一度、開かれている。世界中から100名以上の高校生が集い、座学や討議、スポーツ交流やアート活動を通してオリビズムを学ぶ機会である。日本からは2009年に生徒2名がオブザーバー参加して以来、毎回参加。2015年からは7名のフルメンバーが認められ、参加者選考を兼ねた「国内YF」が、COREやNPOサロン、JOA(日本オリンピックアカデミー)主催で開かれるようになった。このムーブメントを全国に広げ、2020年以降につなげていくためにも、さまざまな機関の連携が不可欠である。国内完結型のYFを高体連主催で開催し、「続けていくための組織づくりに貢献する」ことを目的の一つとした。
- 注2) 東京都高体連に加盟する専門部の一つ。都内の高校運動部についての研究を推進するとともに、毎年「東京都高体連研究大会」を主催し、部活動の今後のあり方やオリビズムについての普及・啓蒙をはかる。全国高体連研究部では同様に全国研究大会を開催。今年1月で第52回となった。
- 注3) スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を“志”に掲げるNPO法人。その前身は1980年代のサッカー関係者の研究会にあり、1997年からサロン2002の名称で活動開始。月例会は今年2月で258回を数える。2014年度にNPO法人化。オリパラ教育事業やU-18フットサル事業などに積極的に関わる。
- 注4) 嘉納治五郎生誕150年の2010年に発足した筑波大学の学内組織で、日本初のOSC(Olympic Study Center)としてIOC(国際オリンピック委員会)から認定を受ける。11校ある附属学校を活かしながらオリパラ事業に先駆的に取り組み、スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業」をリードする。
- 注5) 講義①「TOKYO2020ボランティアとしてのグローバルマナーとおもてなしの心」の講師は、筑波大学客員教授の江上いずみ氏。東京都オリンピック・パラリンピック教育「夢未来プロジェクト」におけるマナー講座担当講師。全国の小中高等学校で「おもてなしの心」をテーマに講演中。<http://ocw.tsukuba.ac.jp/lecturer/江上いずみ/>
- 注6) 日本語による討議。テーマは「オリビズム」に関するもの。
- 注7) 講義②「クーベルタンと嘉納治五郎」の講師は、筑波大学体育専門学群長でCORE事務局長の真田久氏。2月17日の東京都高体連研究大会でもご講演いただいた。<http://www.taiiku.tsukuba.ac.jp/common-data/prof.php?ug&view=42>
- 注8) 演習「OVEP(Olympic Value Education Programm)を用いたグループワーク」のファシリテーターは、筑波大学体育系助教の大林太朗氏。CORE設立時から事務局を担当。<http://www.trios.tsukuba.ac.jp/researcher/0000004018>
- 注9) 実技「ボッチャ」の講師は、筑波大学体育系教授の松原豊氏。筑波大学附属桐が丘特別支援学校から、こども教育宝仙大学を経て、2017年11月に筑波大学着任。アダプテッド体育・スポーツ学研究と実践における第一人者。パラリンピック種目「ボッチャ」を、桐蔭会館内で体験する。<http://hosen.ac.jp/kodomo/teacher2016/matsubara.html>

1. 中学校2年生が地域研究として東京オリンピックについての調査

本校の中学校2年生が総合学習の時間を作り、学年を24班、1班5～6人ずつに分けて調査研究する活動である。対象地域は主に東京都であり、その中で各班が疑問に思ったことを精査し、取材先を決め、まとめ発表をしていくという流れである。オリンピックの発表班は3班あり以下に概要を述べる。

1班目は『東京オリンピックに向けた外国人対応』というテーマで東京オリンピック・パラリンピック準備局、国土交通省道路局企画課、庭のホテル東京、はとバスを取材訪問した。ピクトグラムの調査や道路標識の改善、HALAL食品・製品への対応などを調査し発表した。

2班目は『オリンピックの会場について』というテーマで東京オリンピック・パラリンピック準備局、神奈川県スポーツ局オリンピック・パラリンピック課、東京臨海高速鉄道株式会社を取材訪問した。オリンピック施設についてその調査と、大会後の活用の計画などを東京都と神奈川県に取材し発表した。

3班目は『五輪への観光産業という』というテーマで観光庁観光戦略課外客受入参事官室、(株)ラオックス、墨田区役所防災課、を取材訪問し、浅草寺周辺で街頭調査した。まず観光庁では「五輪が目標ではなく、もっと先を見据えて外国人の受け入れ態勢を敷いている。」との話を聞いた。またラオックス株式会社では「もの消費（ものを買うこと）からこと消費（文化に触れる、〇〇体験）への移行を行っている。」というお話を聞いた。また墨田区役所では災害時への外国人対応のために、『メガホンヤク』『ペンダント型翻訳機』の導入に関するお話を聞いた。それらをまとめ発表した。

2. 高校1年生体育のバレーボールにおけるオリンピック教育の実践

本校高校1年生では毎年バレーボールを単元として取り入れている。年間で約30時間である。本校体育館は1964年東京オリンピック時に日本女子代表の練習会場として使用されたいわゆる「オリンピックレガシー」であることから、毎年単元の初めに体育館の歴史的経緯や当時の様子などを紹介し、生徒たちにオリンピックとのつながりやオリンピック精神について理解を深めた。



3. 第11回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの生徒派遣

8月19日～26日までエストニア国ウルヌルメで行われたプログラムに日本代表として本校生徒1名が参加した。このプログラムは一昨年12月下旬に行われた国内選考会を経て選ばれたものである。世界の高校生が一同に会しオリンピックについて考え自らもスポーツにチャレンジしながら、その精神についての理解を深め、学んでいくというプログラムである。期間中は綿密なプログラムのもと、本校生徒は担当教員から特別賞を頂くなど、素晴らしい活躍をした。



4. 高校2年生体育理論での平昌オリンピックを含めた冬季オリンピックの紹介

12月の体育理論の時間に平昌オリンピックの紹介を行う。ここでは教科書『最新高等保健』の「3 スポーツ文化の楽しみ方」と「4 オリンピックの国際理解」を使用して授業を進める。また補助教材としてスポーツ庁発行の『オリンピック・パラリンピックに関する指導参考資料』や東京都教育委員会発行の『オリンピック・パラリンピック教育 実践事例集』を活用し、オリンピックについての理解を深めていくことを目的とした。

平昌オリンピックでは開催効果として“国家発展の画期的転機の用意及び地域発展の持続可能な遺産創出”と定義し、その精神は「自信感 (Confidence)、血が出る努力 (Effort)、チャレンジ精神 (Challenge)、無限の潜在力 (Potential)」と定めている。これらのことを授業で紹介した。

また1月17日(木)には、平昌オリンピックを中心に冬季オリンピックの紹介を行った。あまりメディアには出ない競技を中心に主に映像を通して紹介した。生徒たちの反応は「(アルペンスキーが) こんなに速いんだ。」やカーリングの映像を見て技術の高さに驚いた。ルーージュ、スケルトンなどは競技自体を知らない生徒が多く映像を通して理解を深めた。また、オリンピック種目の詳しい説明を特集していた新聞記事を教室の後方黒板に貼り出しさらに理解を深めていくように努めた。最後に、全出場種目の役員、選手の紹介をした。



5. 筑波大学オリンピック・パラリンピック推進事業シンボルマーク募集への参加

高校1年生と高校2年生に呼びかけをし『筑波大学オリンピック・パラリンピック推進事業シンボルマーク募集』に参加をした。12件の提出があり、国立大学法人筑波大学オリンピック・パラリンピック総合推進室へ応募した。現在(3/16)結果待ちである。

6. 『クーベルタン - 嘉納ユースフォーラム 2017』への高校生の参加

3月10日(土)、11日(日)に附属高等学校桐蔭会館で行われた、本プログラムへ高校生5名が参加した。内容は1日目『TOKYO2020 ボランティアとしてのグローバルマナーとおもてなしの心』の講義と、グループ討議、2日目『クーベルタンと嘉納治五郎』の講義、OVEP (Olympic Value Education Program) を用いたグループワーク、ボッチャ体験である。約10校の都立高、私立校、附属校の参加の中で同じ高校生がオリンピックについて考えていく貴重な場となった。グループ討議を通じて、オリンピックについて様々なアイデアが出され、単にスポーツの祭典にとどまらないオリンピックの新たな可能性を考える機会となった。

7. 中学生に向けて『筑波大の留学生とオリピズム・パラピズムを学ぼう！～オリンピック・パラリンピックの価値を英語で学び、ゲームを作ろう～』の開講

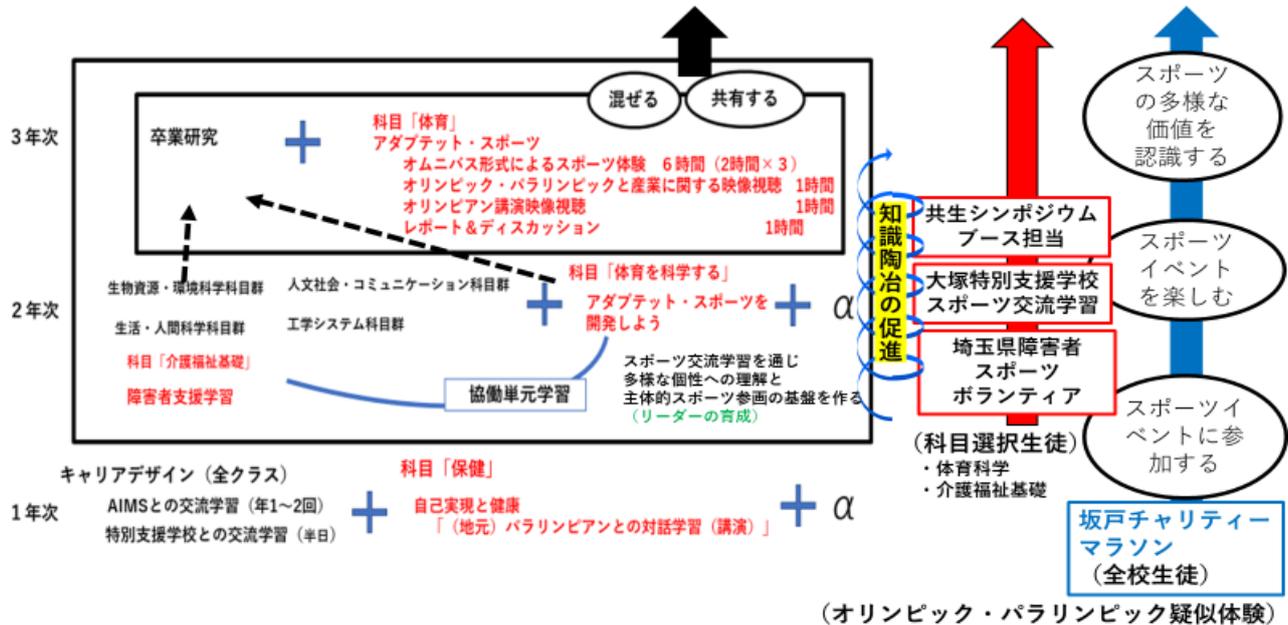
平成30年3月29日(木)に上記のプログラム名で筑波大学つくば国際スポーツアカデミー (Tsukuba International Academy for Sport Studies : 略称 TIAS) の留学生を招き開講する。現在(3/16)15名の中学生が参加する予定である。

附属坂戸高等学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践

附属坂戸高等学校 藤原 亮治

本校は総合学科の高等学校として、様々な探究活動を実践している学校である。2016年度よりオリンピック・パラリンピック教育は本校の教育実践重点研究に位置づけられ、本校の目指す生徒育成に帰する実践となるよう3か年に体系的に組み込まれ、実践されている。年間の指導計画および体系図は以下のとおりである。

2020以降の豊かな社会を創造する主体者としての自覚あるキャリア選択



筑波大学附属坂戸高等学校 オリンピック・パラリンピック教育年間指導計画(2017)

学年	教科	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
1学年	LHR 産業社会と人間	特別支援学校との交流学習 クラスごとで年一回附属または近隣の特別支援学校と交流												
	体育									持久走	パラリンピック観戦①			
2学年	自由選択科目 体育を科学する	自分自身の運動評価を行おう ICTを用いて「バイオメカニクス」運動評価(学生50m走・三段跳び～オリンピックと動作比較分析～)		共同学習 事前指導	スポーツ交流Ⅰ in大塚	ボランティア学習事前指導 アダプテッドスポーツ 体験学習	アダプテッドスポーツ を考えようⅠ	アダプテッドスポーツ を考えようⅡ	スポーツ交流学習 in筑波	学習成果発表				
	自由選択科目 福祉援助技術	知的障害とは												
	体育									持久走				
3年次	体育					クーベルタン・オリンピック史	アダプテッドスポーツ キンボール・ゴールボール・ フラインドベースボール・フラインドゴルフ スポーツと共生社会に関するディスカッション	持久走	ニュースポーツ アルティメット・インディアカ・ネオホッケー					
全体	課外活動・行事	クーベルタン国際 ユースフォーラム 事前合宿		クーベルタン国際 ユースフォーラム		海城のスポーツ庁等参加 筑波マラソン大会 附属坂戸チャリティマラソン								

今年度の教育実践事例をいくつか紹介する。

1. パラリンピアン講演

地元(坂戸市)在住のパラリンピアンである遠藤隆行さん(バンクーバー大会銀メダリスト、日本人初ファン・コンデ賞受賞者)をお招きし、「豊かな生き方と社会環境」をテーマにご自身のこれまでの半生をご講演いただいた。生徒は科目「保健」のまとめとしてヘルスプロモーションの視点から遠藤さんの生活の質(QOL)にどのような要因が影響しているのかについて考察し、自身のこれまで、これからについて考えた。きれいごとではなく、今なおある葛藤と向き合っている姿勢を目の当たりにし、生徒自身が遠藤さんから「学び続けること」「チャレンジし続けること」の偉大さを教えて頂いた。



2.3 年選択体育における単元「アダプテッド・スポーツ」の実施

種目は「キンボール」「ブラインドゴルフ」「ゴールボール」「ブラインドベースボール」で実施した。生徒は各2時間のオムニバス形式で、全てのスポーツを学習し、日頃行っている類似スポーツとの違いや楽しさを実感しながらも、アスリートの持つ技術や戦術の困難さを実感することができたようである。またスポーツには多様なかわり方が存在し、スポーツが苦手な者が「する」だけでなく「みる」「ささえる」側面でスポーツに関わることができることを早い段階から容認できる態度を育むべきであるといった意見や既存の学校体育経験への批判的考察が出されるなど、スポーツへの関わり方について多様な意見が共有された。まとめとして、6月に開催された「東京2020レガシーを生み出す企業のチカラ」において、オリンピック為末大氏の基調講演「アスリートが導き出す共生社会の姿」をyoutube視聴し、批判的考察からディスカッションが行われた。なお、この単元は本校の教育実習生が運営した。毎年この時期に6名程度の実習生が訪れる。生徒のみならず、次世代の教員を志す学生が運営することで、この取り組みが次世代の教育へとつながっていくことを期待している。



3. ピエール・ド・クーベルタン国際ユースフォーラムの生徒参加および成果発表展示

8月に開催された上記大会に本校からは生徒2名、教員1名が参加した。およそ1週間のプログラムの中で、23か国にも及ぶ参加者が協働して、オリンピックの価値に関するディスカッション、スポーツ、芸術など多くのアクティビティを行った。生徒は積極的に参加し、自分の既成概念を壊し、新しい考え方や思考の積み上げ方を体験することができたようである。帰国後この活動の様子・感想をポスターにまとめ、文化祭・本校開催の全国研究大会において展示し、経験を広く共有した。2020年の東京大会翌年に開催される次々回の国際フォーラムは日本での開催が期待されていると聞いた。日本全体がオリンピック・パラリンピックを通じてどのような豊かさを築くのかについて世界中の関心が寄せられている。今浮き彫りになっているスポーツと社会・教育に関する問題とこれまでの成果について、今一度、一人一人が当事者意識を持って考察し、より良い方向に働きかけていく姿勢を継続していくことの重要性を認識させられたフォーラムであった。

4. 大塚特別支援学校との交流学习

本校の科目「体育を科学する」「介護福祉基礎」受講生と附属大塚特別支援学校の生徒で交流会を計5日間実施した。交流の後半にはそれぞれが考案した「アダプテッド・スポーツ」の実践と反省会を行い、多様な人々がともに楽しめるスポーツの考案にむけ、意見を出し合った。坂戸からはバレーボールをアダプトさせた「ワンボール」を考案し、大塚の生徒と楽しんだ。ともにスポーツを楽しむ中で、徐々に互いの違いを認め合い、それぞれの良さに目を向ける姿が多くみられるようになり、最後の交流では終了を惜しみ涙する姿も見られた。



2017年度 ドバイでアジアパラユース大会が開催された。

アジアパラユース大会は4年に1回 アジア地区で20歳以下を対象とした大会である。

本校からは高等部2年の 鈴木海人君が陸上競技の代表に選ばれ参加した。

結果は100m走 12"89 金メダル、走幅跳 5m30 金メダルであった。

鈴木選手は学校のクラブ活動の他に、平日の夜や休日に同僚の体育科原田氏と伴走者の西田氏と練習場所を転々とまわり今回の結果につながった。校内では50Mしか練習が出来ない。練習場所とパートナーおよび指導者の確保は、まだまだ課題が残る。国内の大会に参加するために、当初オリパラの予算を予定していたが、台風の影響で会場の大阪に入った後に大会中止となり、オリパラ予算は執行できなかった。その為、伴走者用のピプスと伴走ロープとゴールボールに変更させていただいた。

ゴールボールは1つ3万円である。需要と供給の関係で値段は決まるのだろうか無ければ授業も練習も出来ないし、数が多くなると校内の予算を圧迫させてしまうのが恐ろしい。

ユース大会に、本校から1人の参加は寂しい限りである。自分の関わっている水泳とゴールボールは、参加者無しという1年であった。水泳に関しては、若手の選手育成をしていないので自業自得であろう。ゴールボール女子チームに現役生徒1名と卒業生1名が候補になっていたが、在學生に関しては学業との両立が出来ていたとは言えず辞退させた。その結果、日本女子チームは不参加になってしまった。これは、選手層の薄さが露呈してしまった事になる。しかし、学校の教員という立場では競技だけをさせていれば良い訳でなく、職業課程では進級することも当然であり国家試験に合格させることを優先させなければならない。在學生たちはドバイに行くものと思っていたので、スポーツと勉強の両立がいかにか厳しいものなのか感じ取ったことであろう。

2017 ジャパンパラゴールボール大会 8/4-8/6 千葉ポートアリーナにて開催された。

出場国 日本、カナダ、ギリシャ、韓国に本校鍼灸手技療法科3年の安室早姫と本校卒業生の若杉遥、天摩由貴が日本代表チームとして参加し優勝した。

また、タイで行われた8/19-8/27 アジアパシフィックゴールボール選手権では女子チームは優勝し、男子チームは3位という結果であった。男子チームには本校卒業生の信澤用秀、小林裕史、川島悠太の3名が代表選手として参加した。

ゴールボールの選手たちは、日頃の練習場所が無いために日中は大学や会社で仕事をして、夕方から本校体育館に週3回集まり21時半まで練習をしている。

数人の同僚達が国内の大会引率や、日頃の練習に関わってくれている。このボランティア活動がなければ、競技維持が傾くと言っても過言ではないと思う。

現在、本校の体育館に練習に来ている選手の何人かは2020東京パラリンピックに出場すると思われる。日頃の練習では、ボール拾いや審判など人手不足でありボランティア不足を感じる日々である。残念ながらチーム附属の日本選手権アベック三連覇は叶わなかった。

そんな中、筑波大学養成施設を中心としたチームが選手の体力測定や映像分析など国内大会に同行など協力をしてくれるよ



鈴木選手と伴走西田氏



チーム附属女子と養成部サポートチーム

うになった。勤務して30年近くになるがこんな嬉しいことはない。今までは自分でできる範囲での事しかできなかったが、大勢の視線からいろいろな意見を聞けることは2020東京に向けてとても心強い。

また、年に数回、在学生の一部と選手たちの体力測定を行い、成長の記録と身体づくりのアドバイスおよびケアなど協力していただけた。2020東京以降もチーム筑波として継続を願いたい。

ブラインドサッカーのアジアユース大会は競技が無かった。国内ではブラサカは知名度があるが、残念ながら国際大会での良い結果はあまり耳にしない。イベントや体験会や学校への出前授業では良く耳に聞こえてくるが。視覚障害スポーツ関係者として感じる事は、若手選手の育成が遅れているのではと感じる。同僚の山本氏は中学生以上の希望者に夕方から、学校の校庭で基礎から指導している。週3回在校生とOBやボランティアが集まり、静まり返った真っ暗なグラウンドで練習をし続けている。2020年に間に合うかは正直素人の自分は解らないが、このような基礎練習を続けていれば必ず2024年の代表で世界と戦える選手になるにちがいない。ブラインドサッカーは授業の教材として近年取り入れたが、基本的なボール操作のレベルまでである。ゲーム形式は危険な要素が多すぎて取り入れられない。体育の授業でサッカーを体験してみてもっと挑戦してみたいと思う生徒たちを集めチームづくりをしている。

2017 IPC 世界選手権水泳大会に本校卒業生 木村敬一、小野智華子が代表選手として選出されていた。開催地のメキシコシティは標高が2100Mあり4月、6月と高地トレーニングを海外で積み重ねて8月の合宿から大会に臨んだが、現地入り2日目にメキシコ大震災に遭い大会は延期になり残念ながら日本選手団は不参加になった。

卒業生の水泳選手達も毎日夕方、都内のプールで練習をしている。タッピングやコーチングなど必要に応じて、勤務後に合流して練習をしているのが現状である。

本来なら日中も練習したいのだが、人手不足で自分も本業があるので付き合えない。

最近2020東京オリンピック・パラリンピックの言葉を耳にする機会が多くなった。

パラリンピックが注目されることは支援学校の職員として嬉しく感じる。

しかし、社会に正しく伝わっているのだろうかと不安に感じる事が多々ある。

パラスポーツといっても視覚障害スポーツは、他スポーツとは異なる事を、声を大にして伝えたい。それは、走る選手なら伴走者の走力、また、ブラインドサッカーならゴール後ろで声を出すガイド、自転車なら前に乗るパイロット、自分が行っている水泳のタッピング等、介助者の瞬時の声掛けの対応力や技術によって選手の実力を十分に引き出せない事が起こりえることである。視覚柔道にしてもゴールボールにしても、競技中に選手に直接指示はないが試合前やタイムアウト中もしくは試合中断中に、どれだけ相手の情報をより正確に解りやすく伝えられるかによって試合を大きく左右させてしまう程である。このことはあまり知られていない。選手達もプロ化が進み競技レベルが高くなってきた現在は、自分も含めて本業の空き時間でボランティアレベルではトップ選手の役に立てない状況である。2020東京オリパラ決定以降に何度か体育教員の増員を求めたが実現することはなかった。期待ばかりされ、視覚選手育成の基礎作りが出来なかったのは残念である。年末の紅白歌合戦でオリンピック・パラリンピックの映像が歌手の後ろのモニターで映し出されていた。凄い事だと思ったが、残念ながらパラリンピックの映像は自分は見ることが出来なかった。文字では横並びなのであるが、複雑な気持ちで新年を迎えた。

最後に、相変わらずの趣旨とは異なるレポートであるが、視覚支援学校ではなかなか趣旨に乗ることが出来ない事が多くご容赦頂きたい。



小野選手 寺西 木村選手



校庭でのサッカー練習風景

はじめに

「2020年」まで1000日を切り、東京オリンピック・パラリンピックへの高揚感がいよいよ高まりを見せている。過日韓国で開催された2018平昌冬季オリンピックでは、日本人選手の活躍がニュースや新聞報道などメディアを通して大々的に報道され、その後の冬季パラリンピックにおいても日本勢金メダル第1号の話題が新聞紙1面を飾った。まさに日本中の話題がオリ・パラ色になっているといっても過言ではなく、昨今それらに関連する話題を耳にしない日はない。そのような状況の中で本校はオリンピック教育として何を目指し、どんな活動を実施していけばよいのか今年も模索と実践を重ねた。2017年度は体育やスポーツ活動を中心に以下の取り組みが展開されたので、その内容を簡単に報告する。

東京五輪音頭-2020-

9月24日(日)に当校グラウンドにて体育祭が行われ、余興種目の一つとして「東京五輪音頭-2020-」が披露された。本校の体育祭は、校内の学校行事で唯一、全学部(幼稚部、小学部、中学部、高等部普通科、高等部専攻科)の幼児児童生徒が参加する一大イベントとなっている。

7月に発表されたばかりの「東京五輪音頭-2020-」だが、小学部1年生から6年生までの児童70名が9月に入ってから一生懸命練習を積み重ね、多くの保護者や学校関係者を前に元気よく踊ることができた。



ハッピー&ピース!

デフリンピックヘゴー!

前述の体育祭で小学部1・2・3年生児童が「デフリンピックヘゴー!」(フィールド種目)に取り組み、簡易的に考案された競技を楽しんだ。またその事前学習として「デフリンピック」について簡単に触れ、聴覚障害者スポーツの国際大会を知る機会とした。

デフリンピック選手との交流

11月3日(金)、文化祭「櫻祭」において本校卒業生のデフリンピック選手3名(第23回夏季デフリンピック競技大会サムスン2017(トルコ)に出場)が来校し、交流活動が行われた。(同窓会企画)

パラリンピック学習

「I'm POSSIBLE」(国際パラリンピック委員会公認教材)を活用し、パラリンピック学習を行った。競技用義足やパッド(陸上競技)、タッピング棒(水泳)、様々な車いすなどがあることを知り、必要な工夫や支援をすることで障害の有無を問わず全力で競い合えることを学んだ。(小学部4年・5年・6年体育)

パラリンピック選手講演会

12月8日(金)、2016年リオデジャネイロ・パラリンピックに出場した高橋和樹氏(ボッチャ)を講師に招き、「やるなら本気で世界一〜障害を持って変わった自分の生き方〜」と題して講演と体験活動を催した。対象は小学部4、5、6年生(34名)である。前半の部では、高橋さんが高校2年生の時に柔道で大けが(頸椎損傷)をして車いす生活を余儀なくされたこと、しかし今はたくさんの人たちに支えながら毎日を送っていること等を、クイズを交えながらわかりやすくお話していただいた。

後半は児童にとって初めてのボッチャ体験を行った。高橋さんにやり方を教わりながら児童同士で試合をし、最後には高橋さん&児童チームと教員チームのゲーム(3対3)を行った。白熱した試合展開となり、ボッチャを十分に楽しむことができた。以下は講演会に参加した児童のコメント(一部)である。

○私は、ボッチャを初めてやってみて、最初は不安でしたが、だんだん楽しくなりました。ボッチャはただボールを投げるだけですが、どの角度で、どんな力加減で投げるか、とても集中するので少しむずかしかったです。高橋さんは、ボッチャ

がとっても上手だったので、すごいと思います。これからも2020年のパラリンピックに向けてがんばってください。世界一になれるようにおうえんしています。(6年女子)

○ぼくはこの経験をする前はポッチャを少し知っている位でした。でもこの経験を通してポッチャのことがよくわかりました。ただボールを転がすのではなく、細かい角度、細かい強さでボールの位置が変わると分かりました。このためには高度な技術も必要だと分かりました。東京パラリンピックでの試合を見に行きたいです。これからもがんばってください。(6年男子)

○ポッチャを初めてやった時は、ただ転がすだけだから簡単だと思ったけど、実際にやってみたら難しかったです。ポッチャにはテクニックが必要だということがわかりました。実際にやって感じたことは、いろんな障害があってもポッチャはできるから、いいスポーツだということです。ポッチャは頭を使いながら転がすのでおもしろいと思いました。(6年男子)

○ぼくはポッチャを体験したのは初めてでした。分かりやすいルール説明、ありがとうございました。ボールを白い球の近くに転がすのはむずかしかったです。高橋さんはすごいと思いました。それから、車いすで行動する時にどんなことに不便があるのか、初めて知りました。今日はぼくたちの学校に来てくださって、ありがとうございました。2020年のパラリンピックがんばってください。(4年男子)



ポッチャ

2018年1月、上記の講演会の事後活動として小学部児童(高学年)が体育の授業でポッチャに取り組んだ。立位で行ったり、椅子に座って球を投げたりしながらゲームを楽しんだ。車いすの方の気持ちになってスポーツに取り組む良い機会になった。

ラート

2月6日(火)、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センターの天野和彦准教授を講師に招き、中学部1、2年生(26名)を対象として「ラート」を用いた体育を行った。この企画活動は今年度で3回目となる。しかしこの度授業を受けた生徒は全員が初めての体験で、恐る恐るラートの中に入りリングの上を歩くところから活動が始まった。練習していくなかで、しだいに恐怖心が消えていき、2時間にわたる授業の最後では、全員が楽しく回転(側転、後転、前転)することができるようになった。ラートに取り組む前は、7名(27%)の生徒が「ラート運動は目が回る」、「怖い」、「気持ち悪くなる」などの理由で「やりたくない」と答えていたが、活動後はその数は0名となり、ほとんどが「もっとやりたい」「もっと高度な技をやってみたい」と答えた。生徒のスポーツの価値観を大きく変える格好の活動になったことは特筆に値する。以下に活動後の生徒のコメント(一部)を紹介する。

(初めてラート運動を体験した感想)

○怖さや楽しさを感じました。はじめは怖くてあまり上手くできませんでしたが、いろいろ教えていただき、怖さは少しありましたが上手くできたので楽しかったです。いろんな技を身につけることができ、いい経験になりました。

○始めはちょっとこわかったけど、慣れると面白く感じた。けれど時々、少しのミスで危ない目にあいそうだったのでちょっとこわいなと思った。もっと高度な技もやってみたい。

○最初はちょっと不安だったけどやっていくうちに少しずつできるようになったし、楽しくなってきた。

○とても楽しかった。不思議な感覚でした。



○思ったよりもつかれた。目が回るかと思ったけど、思ったよりも回らなかったのが良かった。

○最初は「怖い」という気持ちしかありませんでしたが、慣れてきたらコツもわかってきて楽しめました。貴重な体験をありがとうございました。

シッティングバレーボール

3月、小学部児童（高学年）が体育で「ふうせん・シッティングバレーボール」を行った。パラリンピック公式種目となっているこのスポーツ、シッティングバレーボールを基にした易しいゲームのひとつとして、用具やルールなどを工夫しながら楽しく授業を展開した。



アダプテッドスポーツ「タグ柔道」の取組紹介

附属大塚特別支援学校 深津 達也

本校では、2020年に開催される『東京オリンピック・パラリンピック』を踏まえ、知的障害がある生徒たちが、日本の伝統的武道の一つである柔道の本質を体験できることを目指し、本校が独自に開発したアダプテッドスポーツ「タグ柔道」に取り組んでいる。

開発の経緯

2016年1月に、柔道オリンピック（女子柔道48kg級 福見友子選手）との交流会を企画した。しかしながら、投げ技等を含む柔道は、知的に遅れのある生徒にとって、安全面の確保が難しいという問題を持つ。本校の生徒たちがなんとかして、日本固有の武道である柔道を体験できないだろうかとの思いから生まれたのが「タグ柔道」である。

【ルールの規定、教材の工夫】

知的障害がある生徒たちが、柔道の魅力の一つである、相手とのやりとりの中で身体を動かし、勝敗を競う楽しさを感じることができるように、身体の前面に2本のタグ（平らで長方形の布）を付け、お互いに取り合うゲーム「タグ柔道」を考案した。相手のタグを取ることで技が決まったことを示すことにし、相手の前面についている2本のタグを先に取り取ることで勝利とした。初期の段階では、相手とのやりとりを楽しむことを第一とし、それ以外のルールは設けずに実施した。



【ルールの改善と生徒の育ち】

練習を繰り返す行中、生徒たちはルールを理解し始め、フェイントをかけたり、相手の動きに応じて身体を動かしたりすることができるようになってきた。それに伴い、最初は遊びであった「タグ柔道」が、相手との勝負に変わっていった。相手に勝ったときは大喜びをし、負けたときには落ち込むという様子がみられるようになってきた。そこで、柔道が大切にしている「礼」の精神と作法、相手への敬意の気持ちを「タグ柔道」に取り入れることにした。また、礼の意味について理解しづらい生徒もいると考えられたため、試合終了後の握手をルールとして設定し、試合を行なうようにした。これまでは、負けたときに大きく落ち込んでいた生徒が、試合に負けたときに、「僕は負けてしまってたけどよかったけど…勝利した〇〇さん、おめ

でとう」と相手を敬う言葉を口にし、見る人たちを驚かせた。これらの生徒の学びは、柔道が大切にしている「精力善用」「自他共栄」の精神に通ずるものと考え、より柔道に近づけて実施ができるように、柔道着に着替えて「タグ柔道」を行うことにした。そのことにより、生徒たちはより真剣に「タグ柔道」に取り組み、自他を大切にしながらも、全力で勝負を楽しむようになっていった。生徒たちがより素早く、より激しくタグを取り合うようになったため、安全面への配慮としてヘッドギアを装着して行うことにした。このことにより、相手との接触に不安を覚えていた生徒が、より積極的に攻めていけるようになった。

【タグ柔道の魅力】

タグ柔道の魅力として、相手のタグを取れば勝ちというわかりやすいルールのため、多くの生徒が競技のルールを理解および意識して活動に参加できることがあげられる。また、全力で身体を動かし、相手と勝敗を競うことができ、知的障害がある生徒たちが本気で取り組むことができるスポーツといえよう。また、柔道が大切にしている相手への敬意の気持ち、礼の精神は、生徒たちの将来につながる学びとして、非常に重要であるといえよう。

【タグ柔道を通したスポーツ交流の可能性】

本校では、過去に、中学部での体育授業での実施やオリンピックとの交流会での実施のほかに、筑波大学附属高等学校の交流委員会とのスポーツ交流、つくば国際スポーツアカデミー（TIAS）に在籍する外国人学生との交流会を実施し、スポーツを通した交流を図ることができた。また、講道館の協力を得て、講道館大道場にて柔道およびタグ柔道をする機会を得ることができた。今年度は、旭出学園（特別支援学校）とタグ柔道を通した交流会も実現し、初めて会った相手であっても、タグ柔道を通して、ともに研鑽し、ともに楽しむことができた。タグ柔道は、知的障害のある生徒たちが、ルールを正しく理解し、力いっぱい身体を動かして楽しむことができるスポーツであるといえよう。今後は、日本全国の特別支援学校や世界中の子どもたちがだれとでも実践できるように、活動を紹介していきたい。

附属桐が丘特別支援学校におけるオリンピック教育の取り組み

附属桐が丘特別支援学校 寒河江 核

当校のオリンピック教育は、各教科、道徳や総合的な学習の時間、特別活動において、在籍する児童生徒の実態に応じて行われている。今年度は体育・保健体育（ポッチャ）と総合的な学習の時間（小学部）、特別活動（給食）での取り組みを紹介する。

1. 体育・保健体育におけるポッチャの取り組み

スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

本校体育科では体育指導を通じて、豊かなスポーツライフに向けた実践力をつけていくことをポイントの一つとして指導計画を立てている。ポッチャは平成33年度（三重とこわか大会）の全国障害者スポーツ大会から重度身体障害者の参加の充実を目的に導入が決まっている種目でもある。2020年東京パラリンピック大会に向けて機運が高まる中、各地で体験会やイベントが多く企画されており、肢体不自由のある児童生徒を対象にした交流会や大会も多く開催されている。

桐が丘ではこれまで、校外で行われる大会には、高等部の生徒を中心に出場してきたが、今年度は体育での取り組みを基に、小学部、中学部の児童生徒も校外で行われたポッチャの交流会や大会へ参加した。大会への参加は、対象とした学部や学年から希望者が参加した。全員がポッチャの交流会や大会への参加は初めてではあったが、授業での取り組みを基に、試合をしながら工夫したり、作戦を考えたりしながら活動する様子がみられた。中でも、中学部の生徒が参加した「第1回CACカップポッチャ大会」では唯一の中学生チームであったが3位になり、小学部の児童が参加した「チャレンジポッチャ in いたばし」では、5位入賞という結果であった。小学部、中学部、高等部の児童生徒が交流会や大会へ参加したことで、学部の児童生徒間で話題にしたり、健闘を称えたりする様子も見られた。このような活動を契機に、共生社会を目指す「スポーツ交流とシンポジウムの集い」のポッチャ交流へも小学部から高等部まで12名の児童生徒が参加するとともに、休日に地域で行われるポッチャのイベントに参加したり、競技者として大会出場に向けてマイボールを購入し、練習に励んだりする生徒が出るなど学校での取り組みから広がりがみられてきたと感じている。



第1回CACカップポッチャ大会にて
3位の表彰を受ける中学部の生徒



チャレンジポッチャ in いたばしにて
5位の表彰を受ける小学部の児童

2. 小学部における総合的な学習の時間での取り組み

スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

×

スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築

小学部3・4年生の総合的な学習の時間では「みんなでスポーツつくっちゃおう！」という単元に年間を通して取り組んだ。単元の中では、パラスポーツに関する体験や交流を通して、興味関心を広げたり、自ら進んで物事に取り組んだりする態度を育てるとともに、友達とのよりよい活動を考えることを通して、場の状況や友達の様子などを受け止めながら、自分の考えを調整することができるようになることを目標に展開された。

単元のはじめに「スポーツといえば」「スポーツに対する気持ち」を付箋に書いて発表し、友達のを聞いたり、似た考え

をまとめたりする活動に取り組んだ。その後、本校の卒業生でもあるロンドンパラリンピック・ボッチャ日本代表の秋元妙美さん（平成8年度卒業）を講師に迎え、①秋元さんの活動に対する感想、②使用している用具に対して思ったことや考えたこと、③秋元さんから学んだことの3点について付箋に書いて発表し、友達の考えを聞き共有した。



話し合い活動をする児童



卒業生秋元妙美さんの講話を聞く児童



秋元さんの使用している用具の工夫について説明を聞いている様子

これらの活動を踏まえて、「自分たちが楽しむことができる」新しい種目について話し合い活動を通じて作り、実施→振り返り→改善の過程を繰り返し、様々な実態の児童が楽しむことができる「ガードアタックボール」という種目を作った。その後、学習発表会での発表や小学部の他学年の児童に紹介し、実際に楽しんでもらう活動へ発展させた。総合的な学習の時間の中で、スポーツを題材に問題解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む児童の姿がみられた。



学習発表会での様子

3. 給食での取り組み

日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

給食では、「東京パラリンピックまであと1000日」と「給食週間」の2つの取り組みの中で世界の料理や、世界に発信したい日本の料理、食文化についても考えた。給食の提供と合わせて、『給食ミニ新聞』を発行し、給食で提供される世界の料理の紹介をするとともに、食育の視点での話し合いや学びのきっかけとした。



写真7 第1回パラリンピックローマ大会にちなんだ献立



写真8 11月29日(水)は陸上競技用の車いすの展示・体験も行った。

11月29日(水)

【東京パラリンピックまで、あと1000日】

東京パラリンピックまで、あと1000日

11月29日(水)の献立

- ① フォカッパ
- ② オムレツ
- ③ ストランドチキチ

給食ミニ新聞 1/29 (水)

アンケートご質問のお答え

2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催に、給食・食育の観点から、どのような取り組みが期待されていますか？

オリンピック・パラリンピックでは、どんな食事ができるかな？

オリンピック・パラリンピックでは、競技や種目の異なる選手が、それぞれの国や地域から集まってくる。それぞれの文化や食文化の違いを知ることは、とても大切なことです。

オリンピック・パラリンピックでは、競技や種目の異なる選手が、それぞれの国や地域から集まってくる。それぞれの文化や食文化の違いを知ることは、とても大切なことです。

オリンピック・パラリンピックでは、どんな食事ができるかな？

オリンピック・パラリンピックでは、競技や種目の異なる選手が、それぞれの国や地域から集まってくる。それぞれの文化や食文化の違いを知ることは、とても大切なことです。

1月29日(月)学校給食週間

【外国の方に紹介したい日本料理は？】

外国の方に紹介したい日本の料理は？

1月29日(月)のごんて

給食ミニ新聞 1/29 (月)

アンケート結果発表

2020年、東京オリンピック・パラリンピックの開催に、給食・食育の観点から、どのような取り組みが期待されていますか？

日本のおでんいろいろ

日本のおでんは、地域によって食材もつけ方もいろいろ...

おでんマップ

おでんレシピ

http://www.bhhs.jp/government/odenzan.html

1月30日(火)学校給食週間

【できるかな？おもてなし】

できるかな？「おもてなし」

1月30日(火)のごんて

給食ミニ新聞 1/30 (火)

アンケート結果発表

2020年、東京オリンピック・パラリンピックの開催に、給食・食育の観点から、どのような取り組みが期待されていますか？

「MOTTAINAI」

「もったいない」という言葉が、世界で注目されています。

環境分野での「ノーベル平和賞」を受賞したケニア女性、ワンガリ・マータイさん。彼女が「もったいない」という日本語に感銘を受け、世界共通語「MOTTAINAI」として広めることを目指しました。

「もったいない」を生んだ日本では、まだ食べられるのに捨てられている食品、いわゆる「食品ロス」が、現在、年間約32万トンにものぼります。

環境を守り、食べ残しは多くありませんか？「食品ロス」をなくす取り組みも考えていく必要があります。

「てんぷら」は、どこからきた？

天ぷら / tempura

天ぷらは、おでんや鍋の食材を油で揚げた料理で、おでんや鍋の食材を油で揚げた料理で、おでんや鍋の食材を油で揚げた料理で...

このほかにも、国際教育の一環で行われた、国際交流協定を締結している台湾・国立南投特殊教育学校への訪問では、ボッチャを通して交流を行った。台湾滞在期間中は、「全国障害者親子スポーツ大会」と呼ばれるイベントの開会式にも参加し、代表者のスピーチや関連団体のパフォーマンス等を鑑賞して、台湾での障害者の社会参画の様子を見て学ぶことができた。帰国した代表生徒は各々自己の体験を報告し、国際交流体験は広く校内で共有され、世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成を目指した取り組みが展開された。

オリンピズムに基づく、または、関連する校内での取り組みと合わせて、東京都肢体不自由特別支援学校ハンドサッカー大会優勝や高等部3年（今年度卒業）の生徒がドバイ2017アジアユースパラ競技大会の陸上短距離で金メダルを獲得する等の活躍が刺激となり、他の児童生徒も対外的なスポーツ、文化的活動に積極的に関わる姿がみられた。

本校では通常の授業や学校行事、日常の生徒会活動やクラブ活動など様々なところにおいて、オリンピズムに基づく、または、関連する教育は行われている。そういった内容を改めて整理することで、オリンピック・パラリンピック教育について理解を深めることができるのではないかと期待できる。2020年東京大会はもちろん、先の大会でも児童生徒は様々な形でオリンピック・パラリンピックに関わると思われる。オリンピック教育を経て広い視野と様々な視点から物事を捉える力をつけることで、より深く見詰め、楽しむことができるのではないかと考える。今後も学校教育活動全体を通じて、オリンピック・パラリンピックへの関心を高め、オリンピズムや国際平和などについて、児童生徒の意識を高めることができるような実践に努めていきたい。

附属久里浜特別支援学校のオリンピック教育の取組

附属久里浜特別支援学校 河場 哲史

I はじめに

本校は知的障害を伴う自閉症の子供たちを対象とした、幼稚部と小学部だけの学校である。このような学校の実態から、本校ではオリンピック教育の目的を次のように位置づけている。

- ・健康の保持増進のために、体を動かすことに関心をもつこと
- ・身近なスポーツを通して手足の巧緻性や操作性を高めること
- ・競技のルールを理解し、友達や教師、保護者と一緒に楽しむこと

具体的には、日々の運動活動や学校行事、地域の体育大会の参加などに、オリンピックを関連付けながら指導に当たること、少しでもオリンピックを身近に感じたり、幼児児童の運動へのモチベーションを高めたりできるように配慮をしている。子供たちは、今までの学習の積み上げから、運動すること自体の楽しさを味わったり、努力を続けることの喜びを知ったりなど、運動への意識が年々高まってきているように思われる。

今年度の実践を次に紹介する。

II 陸上夏季記録会への参加

1. 概要

神奈川県体育連盟主催の第19回陸上夏季記録会が平成29年8月5日（土）に開催され、本校小学部児童の希望者12名が記録会にエントリーした。毎年参加している行事であるが、年々参加者が増えてきていて、例年高学年中心であったものが、今回は1年生が4名も参加した。

2. 事前の練習

活動の目的を「記録会に向けて、体力の向上を図る。」また、「競技の方法を学び、大会に見通しをもって参加できるようにする。」と設定し、7月5日（水）、12日（水）、19日（水）の放課後に3回の練習を行った。走ることに楽しい児童、前回の自分よりも速く走りたい児童、友達と競走して勝ちたい児童など、それぞれが意欲をもって活動することができた。



記録会に向けての練習の様子

3. 記録会本番

自分にとってのオリンピックに参加するような気持ちで臨んだ児童たち。当日は体調不良等で2名の欠席があったが、参加した10名の児童は、しっかりと最後まで走りきることができ、練習の成果が十分に発揮された記録会であった。

4. 終業式での表彰

1学期の終業式で、本校校長より参加した児童全員に記録証が手渡された。児童一人一人の誇らしげな表情が印象的であった。

III 駅伝・ランニング大会への参加

1. 概要

神奈川県体育連盟主催の第25回駅伝・マラソン大会が平成29年12月2日（土）に開催され、本校小学部児童の希望者8名が参加した。約2キロを走る大会とあって、夏季の陸上記録会よりも参加者が少ない傾向にあるが、例年よりも参加者が多く、今回は1年生が4名も参加した。

2. 事前の練習

活動の目的を「駅伝・ランニング大会に向けて、体力の向上を図る。」また、「長い距離を走ることに挑戦し、大会に見通しをもって参加できるようにする。」と設定し、11月22日（水）、29日（水）の放課後に2回の練習を行った。当日の伴走をお願いしている保護者の方々にも協力していただき、約2キロの学校周辺の特設マラソンコースを走った。保護者と一緒に走ることに楽しい児童、前回の自分の記録よりも速く走りたい、いい記録や入賞をねらいたい児童、友達と競走して勝ちたい児童

など、それぞれが意欲をもって活動することができた。

3. 駅伝・ランニング大会本番

いよいよ待ちに待った大会当日。大会の雰囲気に圧倒され、完走できなかった児童も2名いたが、陸上夏季記録会同様、それぞれが自分にとってのオリンピックに参加するような気持ちで臨み、8名の児童が最後までしっかりと走りきることができた。そして、小4男子児童が、ランニング小学部男子の部で見事3位を獲得することができた。こちらも、練習の成果が十分に発揮された大会であった。

4. 終業式での表彰

2学期の終業式で、本校校長より参加した児童全員に記録証が、3位に入賞した児童にはメダルと賞状が渡された。入賞した児童の照れくさそうなうれしそうな様子が大変印象的であった。



駅伝・ランニング大会の様子



第3位のメダル

IV おわりに

本校のオリンピック教育は、まだまだ試行錯誤の段階で、毎年見直しをしながら行っている。日々の教育活動にオリンピック教育の味付けを行うことで、より意欲的に活動できるようにしていきたいと考えている。引き続き、幼児児童の実態を考慮しながら、今後も運動習慣を継続させることで、健康の保持・増進や余暇の充実拡大にもつなげていきたい。

2018年平昌大会におけるオリンピック・パラリンピック教育

CORE 事務局 福田 佳太

1. はじめに

2018年2月8～12日、韓国で開催された平昌オリンピック・パラリンピック（以下、2018年平昌大会）におけるオリンピック・パラリンピック教育プログラムの1) 組織、2) 事業内容、3) 学校等に関する実践事例の観点から情報収集をするため現地調査を行った。

具体的な調査者、調査内容は以下の通りである。

調査者

宮崎 明世（筑波大学体育系准教授）

大林 太朗（筑波大学体育系助教）

福田 佳太（筑波大学体育系非常勤研究員）

調査内容

- ・平昌オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（The PyeongChang Organizing Committee for the 2018 Olympic & Paralympic Winter Games、以下 POCOG）の Education Team の一員である A Ram Kim 氏にヒアリングを行い、2018年平昌大会におけるオリンピック・パラリンピック教育の組織、事業内容（学校訪問、ウェブ教材等）、実施成果等に関する資料収集を行う。
- ・Gangwon National University（江原大学校）にある Olympic Studies Center 所属の Hong Suk Pyo 教授にヒアリングを行い、2018年平昌大会のオリンピック・パラリンピック教育における大学（研究機関）の役割について情報交換を行う。
- ・2つの競技エリア（Pyeongchang Olympic Plaza、Gangneung Olympic Park）を訪問し、大会期間中の教育・文化に関するイベント、展示物について調査する。



2. 調査結果

韓国での現地調査や資料収集で得た情報等をもとに、2018年平昌大会におけるオリンピック・パラリンピック教育についてまとめた調査結果は次の通りである。

2018年平昌大会は、韓国にとって1988年ソウル大会以来30年ぶりのオリンピック・パラリンピックであると同時に、初の冬季競技大会であった。大会開催にあたりPOCOGは、若者たちがオリンピック・パラリンピック教育プログラムを通じて、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントの一部を担い、自身の健康的な変化や自分の限界を越えて挑戦するきっかけを与えることを目指した。このプログラムは、2015年8月よりオンラインプログラムとオフラインプログラムにて韓国全土で展開され、約600万人の児童生徒が参加した。各プログラムの詳細については、次の通りである。

(1) オンラインプログラムについて

POCOGでは当初、教科書教材(冊子)を作成したがあまり使用されなかったためWebサイト(オンライン)にて教材や指導案を作成・提供した。韓国全土の教員や児童生徒が無料でログインすることが可能であり、月に5万人のアクセスがあった。韓国ではウィンタースポーツの認知度が低いため、冬季競技大会の競技種目やルールを教えることを重視し、ウィンタースポーツや平昌冬季大会への興味関心を高めることを目的とした。このサイトは、WATCH、TEACH、LEARN、DOWNLOAD、NEWS&EVENTSの5つのカテゴリーで構成されていた。POCOGでは、学校の休暇期間中に教員を対象とした教員セミナー(Teaching seminar)を開催し、このサイトの活用方法の説明を行った。各カテゴリーの詳細については、表1の通りである。

表1

カテゴリー	内容
WATCH	<ul style="list-style-type: none"> ・競技種目紹介やスポーツに関する動画(約5分間) ・計27本 <ul style="list-style-type: none"> →オリンピック競技種目紹介動画 15本 パラリンピック競技種目紹介動画 6本 スポーツに関する動画 6本 ・オリンピック、パラリンピックの競技種目紹介動画では、歴史、競技場、用具・服装、種目、得点方法等が紹介された。 ・スポーツに関する動画では、The Olympic Values、The Paralympic Values、The Olympic Truce、Making the Olympic Games Happen、Becoming an Olympic City、The Olympic Torch Relayが紹介された。
TEACH	<ul style="list-style-type: none"> ・指導案と授業用パワーポイントが入手可能 <ul style="list-style-type: none"> →クイズや児童生徒と教師のディスカッションを重視 ・テーマはWATCHと同様27項目 ・体育のみならず、様々な教科で使用可能
LEARN	<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインレッスン ・10時間コース(20-30分/1レッスン) <ul style="list-style-type: none"> →コース終了後POCOGより証明書の授与 →7万5000人が受領(2017年12月現在) ・大会期間中(学校は冬休み期間)、宿題がある
DOWNLOAD	<ul style="list-style-type: none"> ・園児対象の塗り絵 ・テーマはWATCHと同様27項目
NEWS&EVENTS	<ul style="list-style-type: none"> ・学校独自の取り組みやイベントの紹介



Let's get ready for PyeongChang 2018!

The Winter Games curriculum has been designed to help excite, inform and engage students around the country in the countdown to the PyeongChang 2018 Olympic and Paralympic Winter Games.

WATCH

A collection of 26 videos about the sports of the Olympic and Paralympic Winter Games and topics that go beyond sports.

More →



TEACH

Multimedia classroom materials with detailed lesson plans for teachers of all subjects!

More →



LEARN

An online school with video clips and fully interactive activities about the sports of the Olympic and Paralympic Winter Games for students in Korea.

More →



DOWNLOAD

Fun activities about sports and beyond that you can download for free.

More →



NEWS & EVENTS

Visit this section to find out what the Education team has planned and for the coming weeks and join an event close to you.

More →



Hoenggye Elementary School Support...
Students from Hoenggye Elementary Sch...



Kimhwa High School Supports Team It...
Kimhwa High School, the official yout...

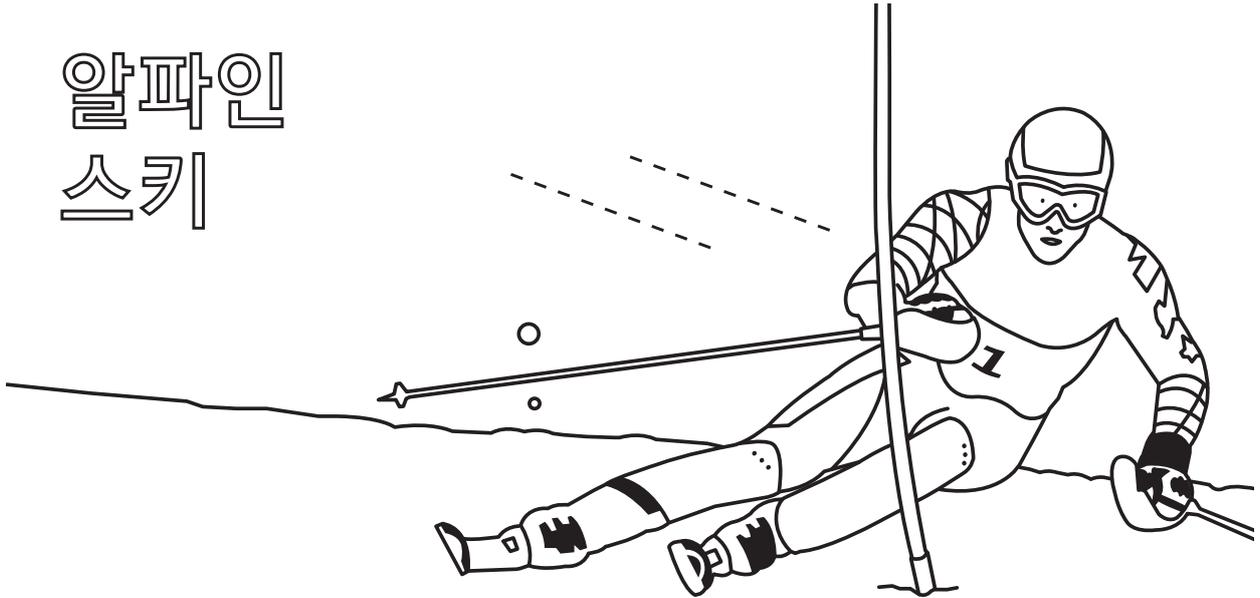
The PyeongChang Organizing Committee for the 2018 Olympic & Paralympic Winter Games 「EDUCATION - HOME」 (<http://edu.pyeongchang2018.com/front/main.php>) (2018年2月15日閲覧) .

학습지도안

단원명	알파인 스키 (Alpine Skiing)		
학습 목표	1. 알파인 스키의 역사와 특성을 탐구한다. 2. 알파인 스키의 경기장, 장비, 경기방식, 경기결과 등의 기초지식을 학습하여 경기에 대한 전반적인 이해도를 높인다. 3. 나의 꿈을 콜라주로 표현한다.	장소 시간	교실 45 분
선택 수업	1. (진로탐색) 일러스트레이터 2. (활동체험) 스키(장) 체험 3. (체육융합) 스포츠+미술(콜라주)		

교수.학습활동		학습 내용
도입 질문		
	<p>1. 질문하고 대답을 유도한다. 정답) 프랑스</p> <p>스키장의 이름은 '레 트와 발레'(les 3 vallées)이다. 단어 뜻 그대로, 발토랑스, 메리벨, 쿠슈벨이라는 이름의 3 개의 계곡이 연결된 스키장이다. 스키장 구석구석을 다 돌아보려면 한달이 걸릴 정도라고 한다. → 인터넷에서 '레 트와 발레'의 위치와 시설물을 사진과 비디오로 찾아보고 감상한다. 선택) 레 트와 발레 소개 영상 https://www.youtube.com/watch?v=kwh6wJ5Z7E</p>	배경 지식 (5 분)
소개		
	<p>[예시 질문]</p> <p>1. 이 그림은 알파인 스키 경기의 특징에 대해 몇 가지 보여주고 있다. 특징에 대해 이야기 해보시오. → 선수들은 허리를 숙이고 다리를 구부리며 얼굴을 든 자세로 스키를 탄다. 스키 뿐만 아니라 한 쌍의 막대를 들면서 균형을 조정한다.</p>	사전 정보 (1 분)
	<p>1. 비디오를 감상한다. 2. 퀴즈를 함께 풀고 정답을 확인한다.</p> <p>Q1 a. 알파인 스키는 알프스 산악지방에서 가파른 경사를 스키를 타고 내려오는 데서 유래되었다.</p> <p>Q2 b. 오스트리아(114), 스위스(59), 프랑스(45) → 괄호는 현재까지 올림픽 메달 획득 개수를 나타냄</p>	정보 확인 (3 분)

알파인 스키



알파인 스키는 용맹스런 선수들이 맹렬한 속도로 산을 타고 활주하는 실상 스포츠입니다.

Alpine skiing is a snow sport where courageous athletes compete down a mountain at very high speeds.



Provided by EF Education First
EF is Official Education Sponsor of the PyeongChang 2018 Olympic and Paralympic Winter Games

www.pyeongchang2018.com/education

The PyeongChang Organizing Committee for the 2018 Olympic & Paralympic Winter Games 「EDUCATION - DOWNLOAD」 (<https://edu.pyeongchang2018.com/front/pages/resource>) (2018年2月15日閲覧) .

(2) 오프라인 프로그램について

오프라인 프로그램에서는, 올림픽, 패럴림픽や스포츠의 가치について様々な活動を通じて子どもたちに学ぶ機会を与えた。

ア. POCOG による学校訪問

POCOC education Team のメンバーがスポーツに携わる仕事をしている人(医者、看護師、トレーナー等)と学校を訪問し、オリンピックやパラリンピックの価値、選手やコーチ以外のスポーツに関わる職業を児童生徒に紹介した。また一方的に教えるだけではなく、児童生徒が主体となりゲームのルール作成をさせオリンピックバリューを学ぶ機会も与えた。2015年に15校から開始し、大会までに韓国国内400校(約130万人)を訪問した。

イ. イベントの開催

2018年平昌大会開催に向け、様々な関連イベントが韓国国内で開催された。例えば、2016年にSchool Exchange Programmeが開催され、3カ国(韓国、日本、中国)の子供たちがそれぞれの他国開催の大会(2018年平昌大会、2020年東京大会、2022年北京大会)を自国でどのようにプロモーションするかを考えた。2017年にはPeace Education Festivalが開催され、7カ国(韓国、日本、中国、ロシア、カザフスタン、インドネシア、フィリピン)から子供たちが参加し、オリンピック、パラリンピックの価値に関するアクティビティを通じて交流が行われた。

また、POCOGの学校訪問やオンラインレッスンを積極的にしている学校より聖火リレーの走者を選出したり、大会期間中には1万6000人(300校)の児童生徒が江陵会場で試合観戦を行った。児童生徒は無料で観戦することができ、教育委員会から学校に生徒一人につき1000円(食事・バス代)が渡された。競技会場では、児童生徒がフラッグなどを活用してどのような応援ができるかのコンテストが実施された。

ウ. 各学校の取り組み

各学校では、様々な取り組みが行われていた。中でも特徴的なものは、次の3つである。

・ Gyeonggi Academy of Foreign Languages

外国人観光客向けに韓国の歴史、文化、食事などを紹介する本を英語で作成した。



GREETINGS
FROM
PYEONG CHANG 2018

경기외국어고등학교
평창 프로젝트

나규원 장현주
김다영 성세은 이서린 황지현 권정유
박은서 조수빈 정유라

The PyeongChang Organizing Committee for the 2018 Olympic & Paralympic Winter Games 「EDUCATION – NEWS&EVENTS」 (<https://edu.pyeongchang2018.com/front/board/view?id=62&page=1>) (2018年2月20日閲覧) .

・ Hoenggye Elementary School

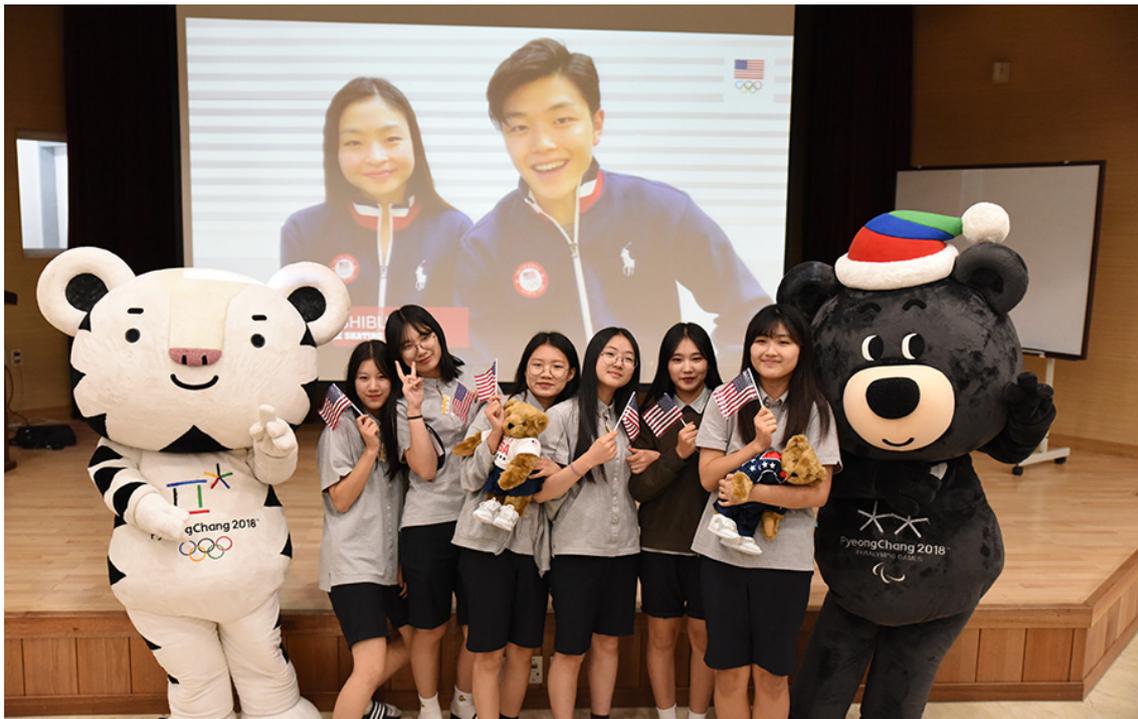
学校全体でイギリスチームの応援を実施した。イギリス大使館の協力を得て、イギリスについて学び互いの文化を教え合う交流やイギリス選手団に手紙を送った。また、オリンピックの歴史や意義、教室でミニカーリングを行いウィンタースポーツについても学んだ。トーチリレーやマスコットのイベントにも参加し、児童のオリンピック・パラリンピックへの機運醸成に努めた。



The PyeongChang Organizing Committee for the 2018 Olympic & Paralympic Winter Games 「EDUCATION – NEWS&EVENTS」 (<https://edu.pyeongchang2018.com/front/board/view?id=74&page=1>) (2018年2月20日閲覧) .

・ Jinbu Middle School

Jinbu Middle School では、POCOG とアメリカオリンピック委員会（United States Olympic Committee、以下 USOC）と協力して、2017 年 8 月より「Thank you PyeongChang」プログラムを実施した。このプログラムは、アメリカ代表のアイススケート選手である Shibutani 兄妹と Jinbu Middle School の生徒たち（約 30 名）がスカイプを利用して交流するものである。海外のアスリートと韓国の生徒が、スカイプを通して交流するという初めての試みであった。毎月互いに 1 つのトピック（Shibutani 兄妹：オリンピックに関すること、Jinbu Middle School の生徒たち：韓国に関すること）を教え合い、計 5 回の交流を行った。その他にも、facebook のクローズページで会話やメッセージを交換し積極的に情報交換を行った。大会期間中、生徒たちは Shibutani 兄妹の試合観戦を行い、競技終了後対面して交流を行った。



The PyeongChang Organizing Committee for the 2018 Olympic & Paralympic Winter Games 「EDUCATION – NEWS&EVENTS」 (<https://edu.pyeongchang2018.com/front/board/view?id=52&page=2>) (2018 年 3 月 5 日閲覧) .

エ. 一校一国運動

1998 年長野大会で初めて実施された一校一国運動が、2018 年平昌大会でも江原道（平昌地区含む）の小学校・中学校・高等学校の計 40 校（約 800 人対象）で実施された。実施内容は、各国の大使館と協力して応援する国の文化や言葉などを学ぶ体験型と、大会期間中小学生が参加国を応援する行進や踊りを披露するフェスティバル型であった。

体験型プログラムを実施した平昌高校では、日本語が必修科目ということもあり、相手国として日本を選んだ。大会開催前には、日本大使館の職員を講師として招き、日本の文化や五輪の注目選手について学んだ。大会期間中には、応援プレート（「SARI FURUYA ファイト」「がんばれ」など）を作成し、バイアスロン女子 15 キロの競技観戦・応援を行なった。

フェスティバル型では、出場国の文化や特徴をイメージした衣装を作り、大会期間中（2 月 12 日）にアイススケート競技などが実施された江陵でパレードを行った。碧灘小学校の児童は日本の技術の高さをイメージしてロボット、仁邱小学校の児童はニュージーランドの海洋資源の豊富さをイメージしてザリガニやクジラなどの衣装を作成してパレードに参加した。



「朝日新聞 DEGITAL」(2018年2月14日)

3. おわりに

2018年平昌大会におけるオリンピック・パラリンピック教育は、POCOGが主導して2015年8月よりオンラインプログラムとオフラインプログラムにて韓国全土で展開された。約600万人の児童生徒が参加したことから、多くの児童生徒にオリンピック・パラリンピック教育が実践されたと考えられる。

多くの取り組みが実施された中でも、「Thank you PyeongChang」プログラムは特徴的な取り組みの一つであった。このプログラムは、POCOGとUSOC、Jinbu Middle Schoolが協力し、アメリカのオリンピック選手と韓国の高校生がスカイプやfacebookを活用して大会前から継続的に交流を行った。このプログラムを通して、オリンピック選手と生徒がコミュニケーションを取りながら、オリンピックの意義や歴史、国際理解や自国の文化等を学ぶことができたと考えられる。また、スカイプやfacebookを活用した交流は、通信技術が発達した現代において非常に参考になる取り組みであった。

調査の過程でインタビューを行ったA Ram Kim氏(POCOG Education Team)によれば、大会終了後はWebサイトはそのまま残しておき、韓国オリンピック委員会(Korea Olympic Committee)と韓国パラリンピック委員会(Korea Paralympic Committee)に引き継がれる予定とのことである。

今回の調査で得た知見をいかし、2年後に控えた2020年東京大会に向けた、そしてその後も継続されるべき有意義なオリンピック・パラリンピック教育の発展に尽力していきたい。

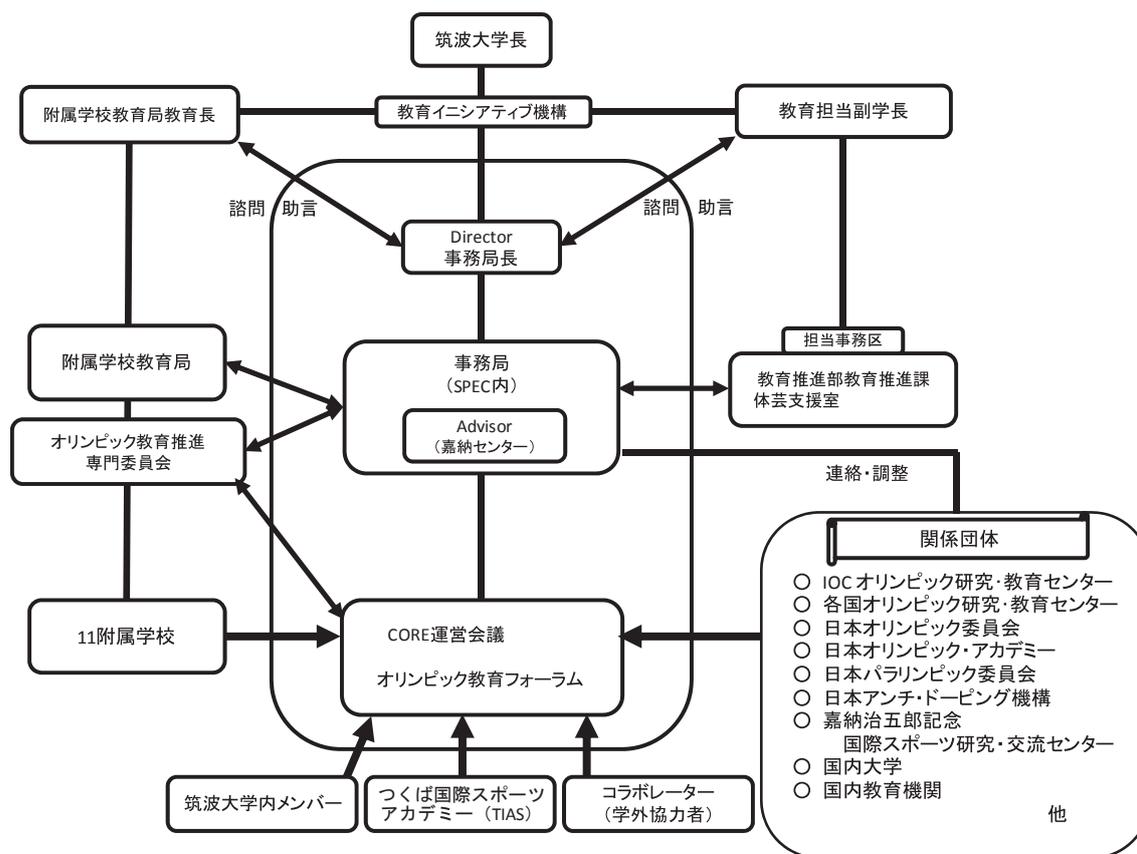
4. 主な参考文献

- ・ The PyeongChang Organizing Committee for the 2018 Olympic & Paralympic Winter Games 「EDUCATION」 (<http://edu.pyeongchang2018.com/front/main.php>) (最終閲覧日：2018年3月5日)。
- ・ United States Olympic Committee (<https://www.teamusa.org/>) (最終閲覧日：2018年3月5日)。
- ・ 毎日新聞『「一校一国運動」新たな花 長野から韓国へ 小中高40校が参加』、2018年2月7日(最終閲覧日：2018年3月12日)。
<https://mainichi.jp/sportsspecial/articles/20180207/dde/041/050/050000c>
- ・ 産経ニュース『韓国でも「一校一国交流」 長野五輪の際の取り組みがモデル』、2018年2月12日(最終閲覧日：2018年3月12日)。
<https://www.sankei.com/world/news/180212/wor1802120048-n1.html>
- ・ 朝日新聞 DEGITAL『日本応援担当の平昌高校 池上さん「上から割り当て？」』、2018年2月14日(最終閲覧日：2018年3月12日)。
<https://www.asahi.com/articles/ASL2D5FXYL2DUTQP01V.html>
- ・ スポーツ報知『韓国の高校生「がんばれニッポン」 日本代表を応援する平昌高校』、2018年2月13日(最終閲覧日：2018年3月12日)。
<https://www.hochi.co.jp/sports/winter/20180212-OHT1T50391.html>

筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会委員（平成 29 年度）

委員長	宮本 信也	附属学校教育局教育長
副委員長	澤田 晋	教育長教授
	松本 末男	附属学校教育局次長
	濱本 悟志	教育長補佐
	小林美智子	教育長特命補佐
	真田 久	体育専門学群長
	江口 勇治	教育局教授
	宮崎 明世	体育系准教授
	梅澤 真一	附属小学校教諭
	國川 聖子	附属中学校教諭
	鮫島 康太	附属高等学校教諭
	登坂 太樹	附属駒場中・高等学校教諭
	藤原 亮治	附属坂戸高等学校教諭
	寺西 真人	附属視覚特別支援学校教諭
	渡邊 明志	附属聴覚特別支援学校教諭
	深津 達也	附属大塚特別支援学校教諭
	宮内 綾香	附属桐が丘特別支援学校教諭
	河場 哲史	附属久里浜特別支援学校教諭

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム組織図



オリンピック教育 vol.6 2017/04-2018/03

2018年7月発行

発行者 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム / 附属学校オリンピック教育推進専門委員会
つくば国際スポーツアカデミー

発行所 オリンピック教育プラットフォーム (CORE) 事務局
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学 GSI 棟 204
事務局長 真田久

編集者 福田佳太
